歴史地理学野外研究　第14号　117～144　2010

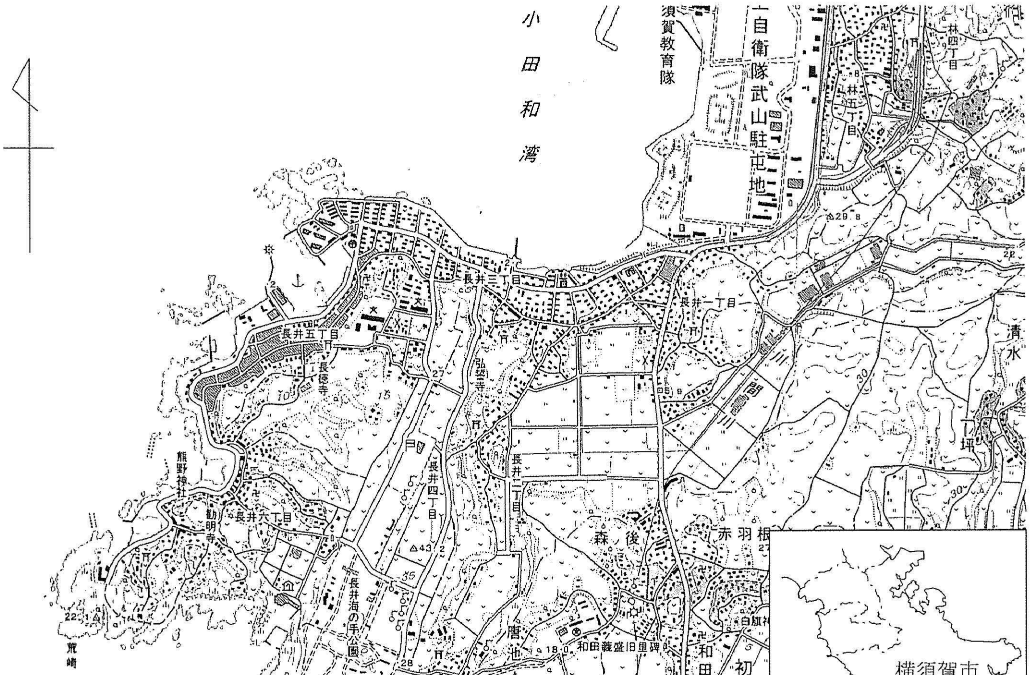
横須賀市長井地区における沿岸集落の地域特性とその変遷
―とくに商業と漁業の動向に注目して―

清水　克志・武田周一郎・金谷千亜紀

I　はじめに

本稿は，近世から高度経済成長期を経た昭和60年（1985）頃までを対象として，港町長井の形成とその後の変遷について，とくに商業と漁業の動向に注目して考察することを目的とする。

長井地区は，横須賀市の南西端に位置し，相模湾に突出した半島状の海蝕台地が大部分を占めている（第１図）。近世の長井村は，浦賀や三崎に次ぐ港町を擁する三浦半島西海岸随一の中心地であり，村高や人口においても，同半島内で最大規模を誇っていた。明治22年（1889）の町村制施行の際，三浦郡では通常，複数の藩政村が合併して行政村を構成したが，その中にあって長井村は同郡内で唯一，１つの藩政村がそのまま行政村へと移行した特異な地区でもある。



第１図　研究対象地域
（国土地理院発行　2.5万分の１地形図「秋谷」「浦賀」（平成18年更新）を使用）

長井地区の内陸部に広がる台地上には一面に畑地が広がり，南接する三浦市域とともに，全国屈指の露地野菜生産地域の一角をなしている。その一方で相模湾沿岸に目を転じると，岩礁が多く変化に富んだ海岸線には，船が繋留される大小の漁港，魚市場と水産加工施設，釣船宿や商店が立ち並ぶ新旧の街路など，在町的な要素と漁村的な要素が混在した景観が今もなお残っている。

一般に三浦半島の村落は，内陸の一部の村落を除き，半農半漁村として概括される場合が多いが，その意味では長井地区もまた典型的な半農半漁村といえる。しかしながら，この半農半漁村という概念は，農業と漁業とが併存する村落全てを包含し得る点で非常に便利ではあるものの，それゆえに個々の村落における農業と漁業との比重や組み合わせ方の差異などを捨象してしまうきらいがあり，対象とする地域の特徴に肉薄できない点に注意を要する概念である。そして三浦半島の村落は，半農半漁村と概括し得る点に，その地域特性の理解を難しくさせてきた理由があるように思われる。さらに本稿で対象とする長井地区の場合，半農半漁村であることに加え，上述したように三浦半島西海岸一帯の中心地として，在町的な要素を持っており，このことが長井地区の地域特性を一層難解にしていると考えられる。

加えて，三浦半島の藩政村は，一般的に複数の集落によって構成される一藩政村多集落型に分類される。三浦半島では，この集落を意味する一般名称として「里」や「部落」·「小名」などが確認できるが，時代や地域によって必ずしも一様ではない。個々の集落名はその集落が存立する小字名とほぼ一致しているため，本稿では，この単位を便宜的に「字」と呼ぶこととする。

ところで川名　登ら[1]は，相模湾沿岸地域の漁業集落の成立過程について，17世紀における江戸日本橋魚問屋の仕入漁村への編成と軌を一にすること，そのような仕入漁村の中には，村落内に漁家が密集する「浜方」が成立し，農業への依存の高い旧来の「岡方」と村落を二分することなどを，小坪村や二町谷村などを事例として具体的に明らかにした。また仕入漁村については，安池尋幸[2]が三浦半島の村落における商品流通を検討する中で，鮮魚の流通構造の解明に先鞭をつけた。さらにこれを受け，山下琢巳ら[3]が三崎町を，清水克志[4]が松輪村の鮮魚供給機能と地域的特質の関わりを具体的に検討した。実際に長井村も近世の一時期，岡長井と浜長井に行政上分割されていた時期があることが知られており[5]，この浜長井こそが江戸への鮮魚供給地であり，かつ港町を擁する三浦半島西海岸一帯の中心地であった。

本稿では，以上の成果や視点を踏まえつつ，まずⅡにおいて長井地区全体を対象として景観や生業構造について概観し，港町を構成する各字の位置や特性を抽出する。その上でⅢでは，港町長井の形成と変遷について考察する。さらにⅣでは，港町長井の形成や変遷と関わらせながら，長井地区の漁業の特性と変化を跡づける。

なお，筆者らが長井地区の歴史的変化に着目するにあたり，最大の手掛かりとした文献として「横須賀市長井の民俗[6]」と『長井のあゆみ[7]』を挙げておきたい。前者は，高度経済成長期に激変しつつある長井地区の伝統的な農業や漁業に関する民俗に加え，近世における長井村の村落構造について検討している。また後者は，長井小学校の創立90周年を記念した郷土誌であるが，一次史料を多く使用して詳細な記述がなされており，多くの示唆に富んでいる。本稿では引用を明示したうえで，それらを活用している。

Ⅱ　長井地区の基本的特徴

1）明治初年の景観

明治期における長井村の景観は，明治初年に作成されたと推定される「長井村地籍図[8]」により明らかになる（第2図）。明治3年（1870）における長井村の耕地は151町4反5畝2歩で，そのうち田は48町9畝16歩，畑は103町3反6畝4歩であり，畑地が耕地の約7割を占めている[9]。村域東部を北流する川間川の下流部には轡堰という溜池があり，その周辺の低地には水田が広く分布し

ている。また新田や溝作には特徴的な櫛状の地割が確認できるが，これは低湿な耕地の一部を掘り下げて作られた堀下田[10]とみられる。一方，村域西部の台地面には，内原・小舞原・大原・高原・打木原など，「原」と付された小字地名が確認できる。こうした台地面は専ら畑地として利用され，多くの谷戸を刻みながら海岸付近まで迫っている。これらの谷戸の多くは水田として利用されており，なかでも松ヶ谷には谷戸の谷頭部に「ヨシイケ」と呼ばれる溜池があり[11]，谷戸の中でも比較的大規模に水田耕作が展開していたことがうかがえる。林地は主に台地縁辺の斜面に分布しており，これらの斜面林の雑木は，第二次世界大戦後も燃料として使われていた[12]。

海岸線をみると，小田和湾沿岸および屋形・新宿・漆山・荒井・栗谷原・長浜に砂浜が広がっていた。長浜や佃嵐の沿岸部には草地が分布しており，これらは秣場として利用されていた[13]。

集落は台地の縁辺や沿岸部に立地しており，大正期には大木根・小根岸・大久保・井尻・仮屋ヶ崎・東・屋形・番場・新宿・漆山・荒井の11の字があった。そしてこれらの字は，根方（大木根と小根岸）・井尻・大久保・浜方（その他の7字）の4区に分かれていた[14]。その後，第二次世界大戦以前に長浜が大久保から独立し，さらに昭和6年（1931）に完成した小田和湾沿岸の埋立地には富浦・岡崎が成立した[15]。なお長井村は，大正15年（1926）2月に町制を施行後，昭和18年（1943）4月，浦賀町・大楠町・逗子町・武山村・北下浦村とともに，横須賀市に編入された。

村域東部には4つの字があり，小田和湾沿岸に大木根と井尻が，内陸部の台地崖下には小根岸と大久保が立地していた。一方，村域西部の相模湾沿岸には仮屋ヶ崎・東・屋形・番場・新宿・漆山・荒井の7つの字が立地していた。第2図の拡大図をみると，浜方に含まれるこれらの字の中でも，東・屋形・番場・新宿の4字では家屋が密集しており，比較的幅の広い道路を基軸とした街村状の集落形態をなしていることが読み取れる。このうち屋形は，長井村で最も創建が古い長徳寺があること，東の字名の由来が屋形に東接する土地であったという伝承が残っていること[16]などからもわかるように，町場を構成する4字の中でも最も成立が古いことが想定される。また町場の西端を占める新宿に対し，屋形・番場を合わせて「宿」と呼ぶこともあるという[17]。したがって，この町場は，屋形を核として次第に拡大したとみられる。これらの町場では明治13年（1880）や大正12年（1923）などに大火が相次ぎ，屋形や番場を中心に大きな被害があった[18]。こうした大火による被害は後述するように，港町長井の商業機能を衰退させる要因ともなった。

第1表は，村明細帳や明治期の統計書をもとにして，近世後期から明治前期にかけての，三浦半島の主要な港町における戸数の推移を示したものである。長井村の戸数は浦賀や三崎に次いでおり，三浦半島西海岸の諸村では長井村に次ぐ戸数を有した小坪村と比べ著しく多かった。長井村が有していた三浦半島西海岸一帯の中心地としての性格はⅢで検討するが，長井村が周辺村落を大きく上回る戸数の規模を誇っていたことは注目できる。

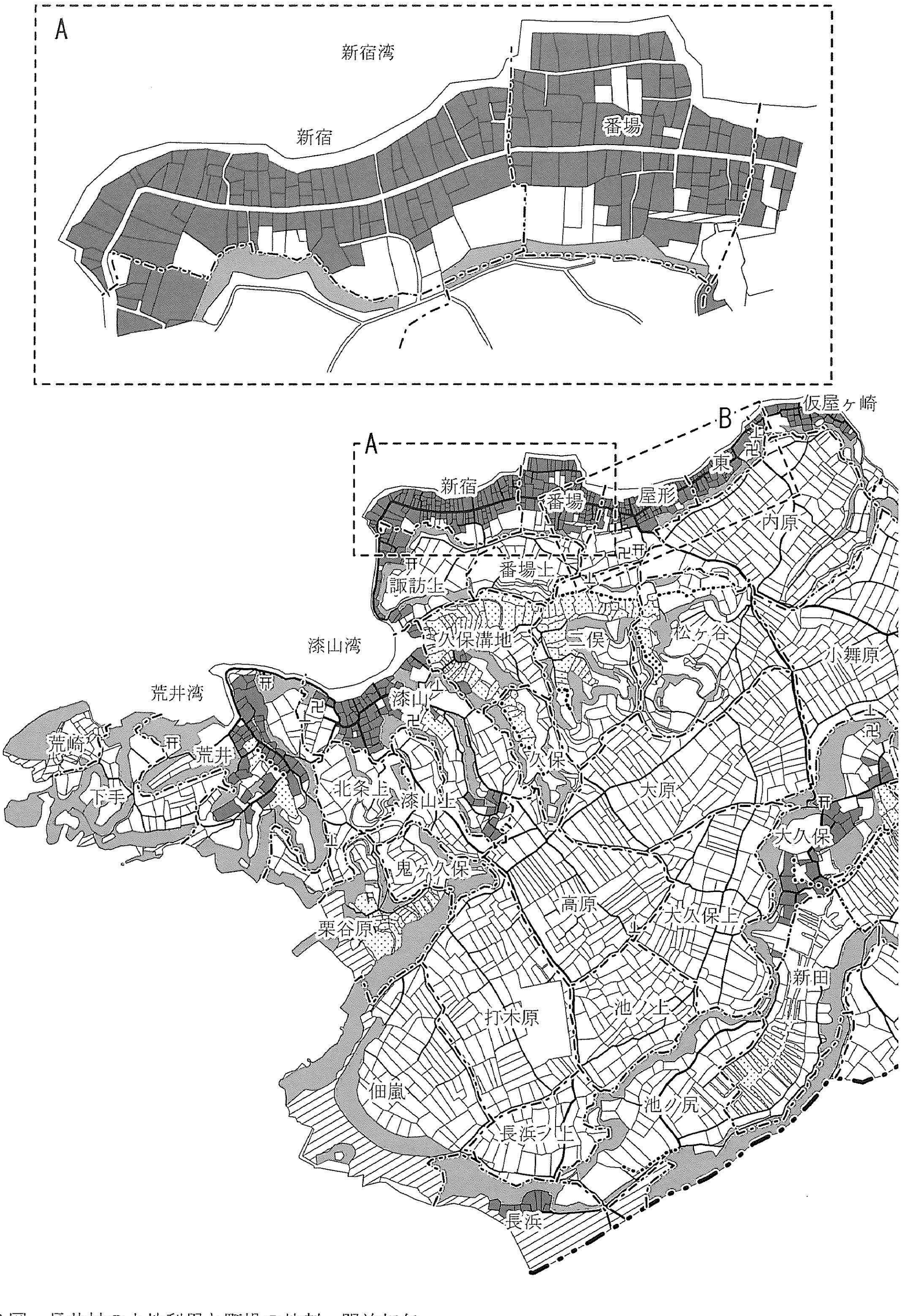
2）長井地区を構成する字ごとの特徴

辻井善弥は，明治5年（1872）の「長井村戸籍簿（壬申戸籍）」を用いて，長井村における戸別の畑・水田の石高分布を作成した上で，長井村の

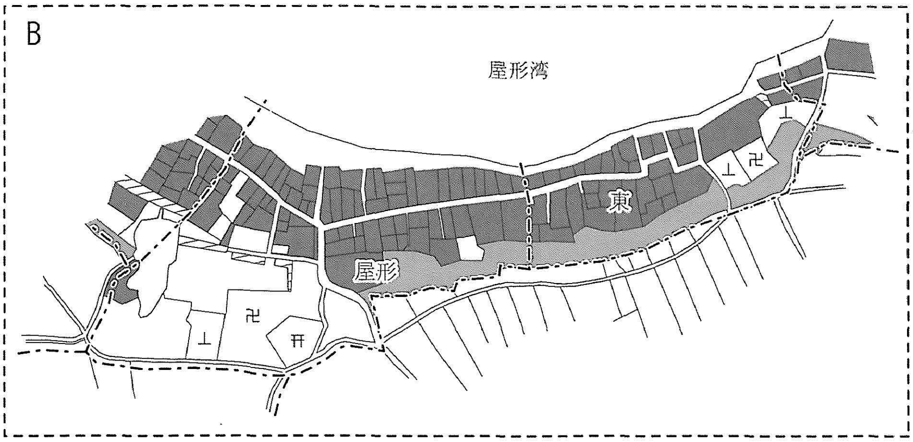
第1表　三浦半島の主要な港町における戸数の推移
－天保12～明治24年（1841～91）－

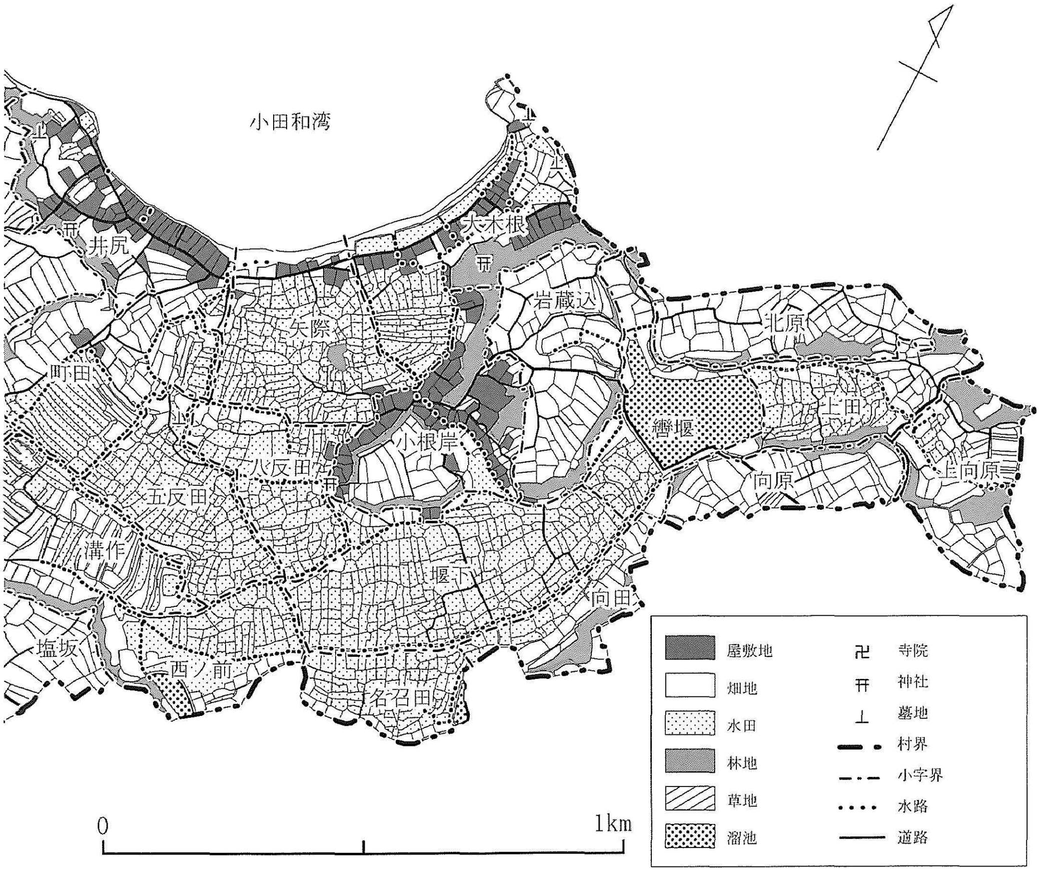
	天保12年（1841）	嘉永7年（1854）	明治15年（1882）	明治24年（1891）
西浦賀	578	120	1353	2955
東浦賀	450	－		
三　崎	597	301	919	1672
長　井	545	563	694	761
小　坪	311	322	363	－

（『相模国村明細帳集成』，『明治15年偵察録』，『明治24年徴発物件一覧』により作成）
注1）嘉永7年における西浦賀の値は史料のままとした。
注2）明治15・24年における浦賀の値は東西の合計値。



第２図　長井村の土地利用と町場の地割－明治初年－
（横須賀市自然・人文博物館所蔵「長井村地籍図」により作成）

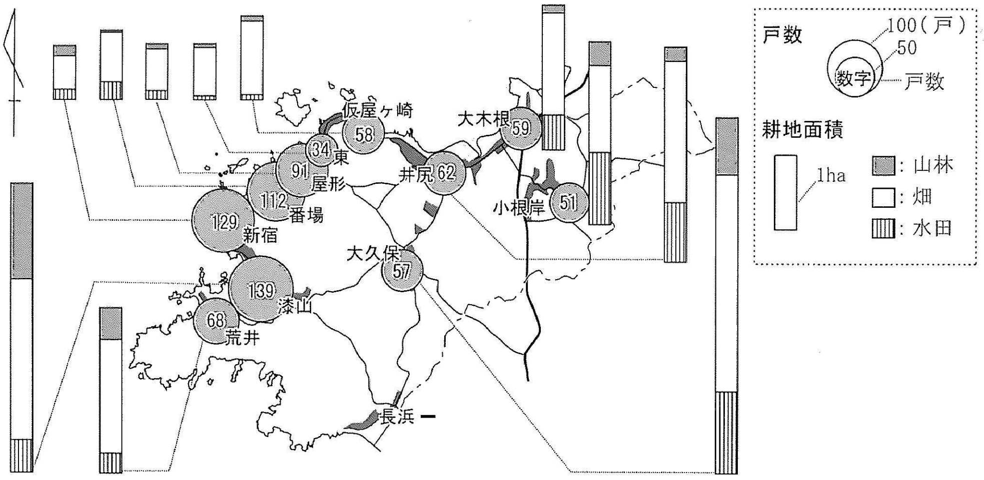

B
屋形湾
東
屋形


小田和湾
井尻
大木根
岩蔵込
北原
矢際
町田
上田
轡堰
小根岸
八反田
五反田
向原
上向原
溝作
堰下
向田
塩坂
西ノ前
名召田
屋敷地
畑地
水田
林地
草地
溜池
寺院
神社
墓地
村界
小字界
水路
道路
0
1km

土地所有について，長井村の総戸数618戸のうち，畑所有者が465戸で，そのうち379戸は所有耕地が1石未満であること，水田所有者が113戸に限定されており，長井村における土地所有高が全体的に零細であったことを指摘している[19]。また職業構成については，農業155戸，農間漁業415戸，漁業23戸，農間商8戸，農間大工3戸，草家根屋，船大工各2戸，石工，桶屋各1戸であり，近世漁村の支配的形態であったといわれる半農半漁，すなわち「農間漁業者」が全体の約7割を占めていることを指摘している。これらの指摘は，長井地区を総体的にみた場合の特徴を端的に示している反面，同地区を構成する個々の字すべてに該当するものでないことは，想像に難くない。そこで，後の時代の資料を用いて，長井地区を構成する字ごとの性格の違いについて検討してみたい。

第3図は，大正12年（1923）の『長井村村勢一班』を資料として，長井地区を構成する字ごとの戸数と所有耕地を示したものである。長井地区を構成する11の字のうち，東部の大木根・小根岸・大久保・井尻では，所有耕地が比較的多く，川間川流域の低地部を擁していることもあって，耕地に占める水田率も高い。また西部の字のうち，漆山・荒井でも，東部の各字と同様，所有耕地が比較的多いが，耕地に占める水田率は低いといえる。これに対して，仮屋ヶ崎・東・屋形・番場・新宿の各字は，所有耕地は極めて少ないといえる。一方，戸数に着目すると，漆山が139と最も多く，新宿（129），番場（112），屋形（91）がこれに次いでいる。長井地区を構成する字のうち，所有耕地の多い東部の各字が60戸前後であるのとは対照的に，相模湾沿岸の所有耕地の少ない西部に戸数の多い字がみられる。このことは，東部の各字や西部の漆山・荒井が塊村状であるのに対して，仮屋ヶ崎から新宿にかけての各字が街村状を呈しているという，集落形態の違いとも対応している（第2図参照）。

第4図は，『1970年世界農林業センサス農業集落カード』をもとに，昭和45年（1970）当時における長井地区を構成する字ごとの農家・林家・漁家数を示したものである[20]。これは高度経済成長期のデータであるため，住宅地化や生業の変化が進行している可能性が高い点，また各戸の兼業の状況までは明らかにし得ない点に留意しなければならないものの，字ごとの伝統的な生業構造を大まかに把握することは可能であるとみられる。実際に，大正12年と昭和45年の戸数を比較した場合，小田和湾沿岸の井尻・仮屋ヶ崎，国道134号線

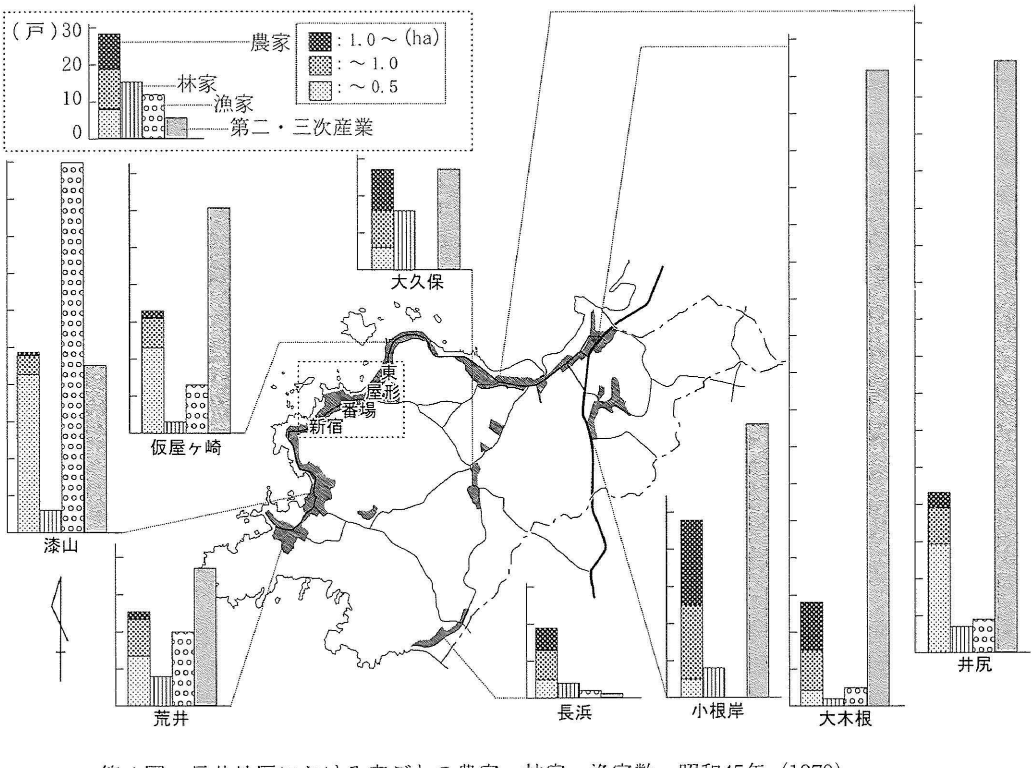


第3図　長井地区における字ごとの戸数および耕地反別－大正12年（1923）－
（『大正十二年　長井村村勢一班』により作成）

に面した大木根や小根岸などでは著しい増加がみられ，しかもこれらの各字では第一次産業を主生業としない家が相当確認できる。

第一次産業を主生業とする家に限ってみると，各字の性格の違いについて，以下のような点を指摘することができる。まず，東部の大木根・小根岸・大久保・井尻は，農業もしくは林業を主生業とする家の割合が高く，しかも井尻を除いて，所有耕地1ヘクタール以上の農家の割合も高い。また，内陸部に位置する小根岸・大久保では，漁家が全く存在せず，いわば純農村的であるのに対し，大木根・井尻は，農業への特化が著しいものの，小田和湾に面し，わずかながら漁家も存在するという違いがみられる。

一方，西部に目を転じると，東・屋形・番場・新宿が非農業集落となっていることが注目される。これらの各字は，街村状の集落形態をなし，大正期において所有耕地が極めて少なかったこととも対応している。実際に，東や新宿にはカツオやサバなどの釣漁を主生業とする漁家が，屋形には魚仲買人が，番場には旅館や料亭を含む様々な商店が多く存在し，これら4つの字では，漁家もしくは商家などの非農業世帯が大多数を占めていたといわれている[21]。残りの仮屋ヶ崎・漆山・荒井は，それぞれ農家と漁家が相半ばする字であるが，両者の構成比，農家の所有耕地などは様々である。このうち荒井は，漁家の構成比がさほど高くなく，農家の約半数が50アール以上の耕地を所有しているのに対し，漆山は漁家の構成比が著しく高く，農家の大多数は所有耕地50アール未満の零細層で



第4図　長井地区における字ごとの農家・林家・漁家数－昭和45年（1970）－
（1970年世界農林業センサス農業集落カードにより作成）
注1）東・屋形・番場・新宿はデータなし（非農業集落）。
注2）基図として，国土地理院発行2.5万分の1地形図「秋谷」（昭和32年資料修正）・「浦賀」（昭和35年資料修正）を使用。

ある。また仮屋ヶ崎は農家と漁家の構成比や所有耕地50アール未満層の農家の割合などの点で，井尻と近似している。

さらに，漁業の内容にも，字ごとの質的な差異を確認することができる。井尻を中心とする小田和湾沿岸では，磯建網（イセエビ）や囲い網（ボラ）などの刺網漁，テングサやヒジキなどの採藻に加え，かつてはシラスウナギ漁も盛んであった[22]。また昭和９年（1934）には海産稚アユが発見され，特別採捕許可によって，現在まで同地区の特産物となっている。小田和湾沿岸において行われる漁業は，農家が上記の特産物の捕採を副業的に行う場合が多く，概して「『農主漁従』の細かい商売[23]」であったといわれている。

一方，屋形湾・新宿湾岸に位置する東・屋形・番場・新宿では，カツオ・サバ・イカなどの一本釣りや，イナダ・ワラサ，キハダマグロなどの延縄釣り，カジキを銛で突く「ツキンボ」漁，アワビやサザエを捕採する覗突（みづき）[24]や裸潜りなどが行われた。これらの漁法はいずれも，操船技術を含め高度な専門技術を要するものであり，当該地区は，男性が主体となって，漁業に専従する専業的な漁家が密集する地区であった。

さらに，漆山湾・荒井湾岸に位置する漆山・荒井では，刺網漁などの漁業を主体としつつ，集落背後の耕地での自給的農業を組み合わせた，「漁主農従[25]」の漁家が卓越していた。刺網漁の場合，網の上げおろしは早朝に限られるため，漁家では男女ともに昼間は農業に従事したり，網の手入れなどを行ったりしていた。一方，大久保から独立した長浜では，地引網によるイワシ漁が盛んであった。

これらの分析から，以下の二点が指摘できる。まず一点目は，長井地区を構成する各字は，農業と漁業の比率や組み合わせ方が多様であることから，同地区は，性格が大きく異なる字の複合体であるといえる。しかもその各字は，農業専従の岡集落と漁業専従の浜集落に単純に二分し難く[26]，各字を「半農半漁村」として一律に括ることは，実態を十分に把握していないといえる。二点目は，沿岸部の東・屋形・番場・新宿の４字では，家屋が密集して街村状をなし，農業への依存度が極めて低い地区を構成していることである。三浦半島において，昭和45年の『農業集落カード』で「非農業集落」に位置づけられている集落は，住宅地化が著しい半島北・中部を別とすれば，長井地区の４字と，三崎，城ケ島のみである。つまり，この４字は，三崎と同様，在町的な性格と漁村的な性格とを併せ持った地域であるとみなすことができる。以上のことを踏まえ，次章以降では，町場を構成するこれらの字に焦点をあて，港町が持つ商業的機能や中心性，漁業の変化について検討してみたい。

Ⅲ　近世から近代における港町長井の変遷

1）近世における港町長井の繁栄

a. 三浦半島西海岸一帯の中心地としての長井

近世における長井村は，浦賀・三崎に次ぐ三浦半島屈指の港町として位置づけられる。まずは，その商業機能について，三浦郡太田和村の上層百姓である浅葉家の当主が，天保期から明治前期にわたって記した「浜浅葉日記[27]」から，近世後期の長井村の状況，周辺村落との関係をみてみたい。

浅葉家の者が長井村を訪れる目的としては，①食料品の購入，②下肥や藻草といった肥料の購入，③医者への訪問などを挙げることができる。①については，北川屋を利用する場合が多く，ここでは米穀や酒，野菜などの飲食料，砂糖・酢・醤油などの調味料のほか，提灯や蝋燭といった雑貨など，多様な品物が販売されていた[28]。②は長井村に町場が成立しており，かつ漁家が集住していたことを示している。③については，浅葉家では浦賀村・三崎町・堀内村・和田村の医者とともに，長井村の大久保・小根岸の医者を利用していたことが確認できる。加えて，文化・文政期には荒井の鈴木呉雪を中心に俳諧が盛んに行われ，いわば「文化サロン」が形成されていたことからも，文化面での優位性がうかがえる。鈴木家の庭と同家代々の墓所である長慶寺には，松尾芭蕉の

句碑がそれぞれ1基ずつ残されている[29]。

時期は前後するが，元禄11年（1698）の「衣笠村諸色村鑑[30]」には，「万買物之儀者浦賀村・長井村，壱里半・弐里程参諸用相達候事」とあり，少なくとも17世紀後半には，長井村に商業機能が集積していたことがわかる。第2表は，弘化5年（1848）に実施された農間渡世調査に基づき，三浦半島西部・南部諸村の商人数を示したものである。三崎町・長井村・堀内村が他村に比して圧倒的に多くの商人数を誇っている。前述した太田和村や衣笠村の事例を勘案すれば，こうした村々には，商人数や業種の少ない周辺村落から，買い出しを目的とした人々が訪れていたことがうかがえる。長井村では，米穀や酒，荒物類を扱う商人が25名と最も多く，ほかに湯屋5名，古着屋4名，髪結4名，質屋3名であった。これらに加え三崎町[31]に確認できるような「肴商人」や「棒手商人」といった，魚仲買人や行商人の姿がみられたことも想像に難くない。

このように，少なくとも近世中期以降，長井村は周辺村落から多くの人々が訪れる三浦半島西海岸における商業や文化の中心地となっていた。以下では，長井村が西海岸一帯を後背地とする中心地となり得た要因について検討していこう。

b. 江戸への鮮魚供給拠点としての長井

長井村の鎮守である荒井の熊野神社の石段脇には，「石坂寄附」と刻まれた2つの石垣が残されている。その成立年代は不詳であるが，それぞれの寄進者は「日本橋魚問屋」と「四日市干物問屋」の商人である。

「日本橋魚問屋」の商人とは，尾張（屋抜カ）善三郎・西宮徳兵衛・相模屋新助の3名を世話人として，伊勢屋伊兵衛・和泉屋清七・越前屋庄兵衛・富岡勘四郎・尾張屋千太郎・鷲野弥兵衛・伊勢屋善四郎・木屋庄左衛門・大坂屋三郎兵衛・越前屋宗吉・伏見屋弥助・島屋吉左衛門・大和田□（欠損）良兵衛の16名である。「四日市干物問屋」の商人とは，金屋善兵衛・伊勢屋吉左衛門・越後屋藤兵衛・村田要八・越後屋新七・金屋仁左衛門・中村八兵衛・伊勢屋伊兵

第2表　三浦半島西部・南部諸村の戸数・人口・商人数－弘化5年（1848）－

村名	江戸魚問屋の仕入漁村	明治以降の町村	戸数（戸）	人口（人）	商人数（人）
逗子		田越	－	347	4
柏原			－	87	－
堀内		葉山	291	1645	39
下山口			－	577	15
一色			－	782	13
長柄			76	410	2
秋谷	△	中西浦	162	1550	18
芦名	△		138	850	16
佐島	△		－	917	11
長坂			－	554	4
荻野			20	107	3
林		武山	98	520	3
長井	△	**長井**	**560**	**2914**	**41**
三戸	△	初声	228	655	8
赤羽根			88	492	7
本和田			79	455	7
下宮田			－	720	6
三崎	●	三崎	300	1337	44
二町谷	△		－	674	8
向ヶ崎	△		80	405	6
小網代	△		－	568	5
城ヶ島	●		70	392	5
東岡			38	99	5
宮川	△		79	385	3
三崎城	●		73	338	1
原			38	218	1
中野岡			－	27	1
上宮田	△	南下浦	252	1290	14
松輪	●		173	959	10
金田	△		171	937	5
菊名	△		77	439	3
毘沙門			－	487	1
長沢	△	北下浦	228	1244	7
津久井	△		156	800	7
野比	△		147	875	6

（『三浦古文化』46により作成）

注）仕入漁村の△は四組問屋の仕入漁村，●は新肴場問屋の仕入漁村を示す。

衛・竹屋七郎兵衛・相模屋忠左衛門・樽屋仁兵衛・住吉屋伊助・住吉屋又右衛門・丸屋仁兵衛と，世話人の油屋喜兵衛・西宮仁兵衛・住吉屋仁兵衛の３名を加えた17名である[32)]。

18世紀以降，江戸には日本橋・新肴場・芝雑魚場・四日市の４つの魚市場が存在したが，熊野神社の石垣を寄進した商人は，日本橋と四日市の魚市場に属する商人であった。日本橋の魚市場は，徳川家康の江戸入府以来の歴史を持つ本小田原町組・本船町組を始原とし，後に加わる本船町横店組・按針町組の４組の魚問屋仲間によって構成されていたため「四組問屋」とも呼ばれ，なかでも始原である２組は「古場」とも称された。これに対し，「四日市」と俗称される江戸橋広小路に設定された四日市組・小舟町組からなる四日市と，延宝２年（1674）に日本橋本材木町に創設された新肴場は，いずれも四組問屋から分離独立する形で成立したものである[33)]。

長井村は佐島・芦名・秋谷，下浦地域の諸村などとともに，「古場浦」すなわち四組問屋の仕入漁村の１つに数えられる。一方，後発の新肴場は，「古場浦」の間隙をつく形で三崎町をはじめ東浦賀・西浦賀や城ヶ島・松輪・小坪などの諸村を仕入漁村に編成し，後には相模湾北岸の諸村にまで勢力を拡大させた[34)]。各魚市場が扱う品目は，四組問屋が鮮魚と塩干魚，新肴場・芝雑魚場は鮮魚のみ，四日市は塩干魚のみであった。つまり，長井村は新肴場に属して鮮魚を専門的に供給する三崎や浦賀とは異なり，四組問屋・四日市の両魚市場と契約関係を結び，鮮魚・塩干魚を問わず，豊富な海産物を盛んに江戸へ送り出す漁村であったといえる。

また，荒井の長慶寺に残された文政５年（1822）の「寄進物回向帳[35)]」には，寄進者として長井村の百姓のほか，江戸の商人が名を連ねている。これを熊野神社の石垣の寄進者と照合すると，２つの石垣の寄進者のうち，名前部分に下線を付した四組問屋の６名が「生魚問屋」として確認でき，「四日市干物問屋」では１名が一致する。とりわけ，両事例で確認できる尾張屋善三郎は，熊野神社の境内に以下の文言が刻まれた一対の狛犬を寄進している。

（左）　天保四年巳六月吉日　現住　覚浄代
（右）　願主　日本橋小田原町　尾張屋善三郎
　　　　世話人　東町　仮屋ヶ崎中

このことから，第一に日本橋魚市場に属する尾張屋善三郎は，江戸の魚問屋の中でもとくに長井村と深い関係を持つ商人であったこと，第二に世話人が「東町・仮屋ヶ崎中」であることから，尾張屋が東や仮屋ヶ崎の魚仲買人と取引関係を結んでいたことが推察される。以上のような寄進物の存在は，江戸の魚問屋が長井村を鮮魚供給の重要な拠点として認識し，両者の間に強固な結合関係が形成されていたことを意味している。

それでは，長井村に集荷された鮮魚や塩干魚は，どのように江戸へ運搬されたのであろうか。第３表は，享保期における三浦郡の主要港の保有船数を示したものである。輸送用船舶のうち，押送り船・五大力船は江戸への廻漕に用いられた船種であるが，とくに押送り船は鮮魚を運搬する漕帆兼用の快速船であった。長井港の押送り船の保有数は三崎港に次いで20艘であり，すでに享保期

第３表　三浦郡における港別の保有船数
－享保５年（1720）－

船種／港名	輸送用						漁撈用	合計
	押送り船	五大力船	小買船	薪船	灰とり船	計	計	
長井	**20**	－	－	－	－	**20**	**55**	**75**
下宮田	－	－	－	－	2	2	6	8
小網代	－	－	－	－	－	－	13	13
諸磯	－	－	－	－	－	－	5	5
三崎	29	－	58	－	－	87	194	281
久里浜	2	－	－	－	－	2	41	43
西浦賀	3	7	－	－	－	10	14	24
東浦賀	8	6	－	－	－	14	46	60
走水	2	－	－	－	－	2	67	69
浦郷	5	－	－	2	－	7	46	53

（「豆相海浜浦々図」，『三浦古文化』３により作成）

には鮮魚供給の拠点として位置づけられていたことがわかる。また，寛政7年（1795）の「川船御役所下書控[36]」によれば，長井村の船持が押送り船を新造する際には，多くの場合，船大工の「長井村与次兵衛」に造船を依頼している。こうした船大工の存在は，長井村の漁場としての，そして鮮魚・塩干魚供給拠点としての機能を補強するものであるといえる。

押送り船を用いた鮮魚の流通経路については，安池尋幸によって具体的な検討がなされている[37]。安池によれば，長井村で水揚げした魚は，まず長井村から横須賀や公郷村の船持の下に廻漕・岡附され，そこから船で江戸の魚問屋へと輸送されるという方法がとられていた。このほか，地元の壱割船[38]と地引手船を用いて直接「江戸送り」するという方法があった。また，宝暦6年（1756）の「相模国三浦郡秋谷村差出帳控[39]」には，「御廻米江戸廻之儀，当村浜迄道法五町ほと附出シ，小舟ニ而瀬取，長井湊迄壱里ほと積出シ，夫より廻舟ニ而相廻シ申候」とあり，長井村に周辺村落から年貢米が集荷され，江戸へ廻送していたことがわかる。

このように，江戸内海を結ぶ海上ルートによって長井村と江戸は直接的に結びつき，長井村からの鮮魚・塩干魚，年貢米輸送，江戸からの物資輸送を可能にしたのである。こうした鮮魚・塩干魚供給拠点，さらに年貢米などの輸送にみられる流通拠点としての機能の集積は，近世における港町長井に繁栄をもたらす重要な要素となっていた。

2）明治・大正期における商業機能の変容

明治期における公共交通機関の発展は，江戸（東京）と直接的に結びついていた港町長井に多大な影響を与え，その流通拠点としての優位性を低下させることとなった。明治14年（1881）に開通した三崎と東京を結ぶ汽船は，三崎・松輪・岩浦（金田）・下浦（津久井）・浦賀を寄港地とし，近世以来の押送り船に代わって海上の主要な輸送方法となった。陸上交通では明治22年（1889）に国鉄横須賀線が開通し，横須賀が東京・横浜からの日帰り圏となった。長井から東京へ向かう際には，海上交通では汽船の寄港地に，陸上交通では横須賀へ出る必要があったが，長井と横須賀を結ぶ公共交通機関の成立は，大正7年（1918）の乗合バスの開通を待たなければならなかった。

さらに，港町長井を構成する沿岸部で頻繁に火災が発生したことは，近世以来の商業機能を衰退させる1つの要因となった。とくに明治13年（1880）の火災は，東・屋形・番場・新宿の大部分を焼失する大火であり，これによって，北川屋をはじめとする有力な商人が長井を離れていったとされる[40]。こうしたことを背景に，明治期における長井は，従来有してきた中心性を著しく弱め，三浦半島における相対的な地位を低下させていった。しかしながら，明治39年（1906）の『三浦大観[41]』では，長井村の「海岸に沿」った集落について，「漁村ではあるが市街といひ得べき所」と紹介されている。このことから，交通上の不利や火災の頻発といった苦難を経てもなお，「市街」としての体裁と機能を保ち続けていた港町の状況がうかがえる。

その後，明治43年（1910）には長井村への汽船の就航が実現し，長井村は海上交通で再び東京と結ばれることとなった。この汽船は魚の輸送を主目的とするものであったが，人や荷物の輸送にも利用され，寄港地となった番場には，1日1度の寄港を待つ乗客を顧客として，多くの商店や旅館・料亭などが成立していった。番場は東接する屋形とともに「宿」と呼ばれていたが，大正初期には「仲町」とも称された[42]。長井港は汽船の就航を契機として，番場を中心に再び繁栄期を迎えたのである。長井全体で商業を本業とする戸数は大正6年（1917）には161軒[43]であり，昭和2年（1927）当時の長井町の状況を記した『郷土資料[44]』によれば，173軒の商店が営業し，第4表に示した諸品目が扱われていた。これらの商品の主な仕入先は横須賀・浦賀・東京・藤沢であり，長井町からの主な移出品は魚類と野菜類であった（第5表）。

番場には商店以外にも様々な施設が立地していた。行政・金融機関については，明治6年（1873）

第4表　長井地区における商店の取扱品目・商店数－昭和2年（1927）－

（単位：軒）

規模	品目	戸数
大商店	雑貨類	16
	魚類	11
	呉服	2
	米類	2
小売店	魚類（仲買）	25
	魚類（小売）	25
	菓子果物	61
	砂糖類	17
	雑貨	14
	酒類	13
	塩	12
	煙草	12
	醤油	10
	豆腐	4
	米穀	4
	薪・木炭	4
	荒物	3
	植木	3
	家畜	3
	化粧品	3
	足袋・股引類	3
	売薬	2
	学校用品・小間物	2
	金物類	2
	下駄	2
	石油	2
	茶	2
	茶	2
	陶器	2
	肉類	2
	青物	1
	空樽・空瓶	1
	海草	1
	乾物	1
	玩具	1
	漁具	1
	氷	1
	ゴム靴	1
	材木	1
	自転車	1
	煎餅	1
	竹類	1
	玉子	1
	テグス	1
	肥料	1
	ポンプ	1
	綿糸（漁具糸）	1
	麺類	1

（『郷土資料』により作成）

第5表　長井地区における商店の商品取引先－昭和2年（1927）－

取引先	移入品	移出品
東　京	呉服類	魚類・野菜類
鶴　見	－	野菜類
横　浜	－	魚類・野菜類
横須賀	酒類・米穀類・学校用品・綿類・小間物・氷・玩具・自転車	魚類・野菜類
浦　賀	醤油・塩・酒類	－
藤　沢	荒物・綿類・砂糖類・下駄・呉服物・小間物・金物類	－

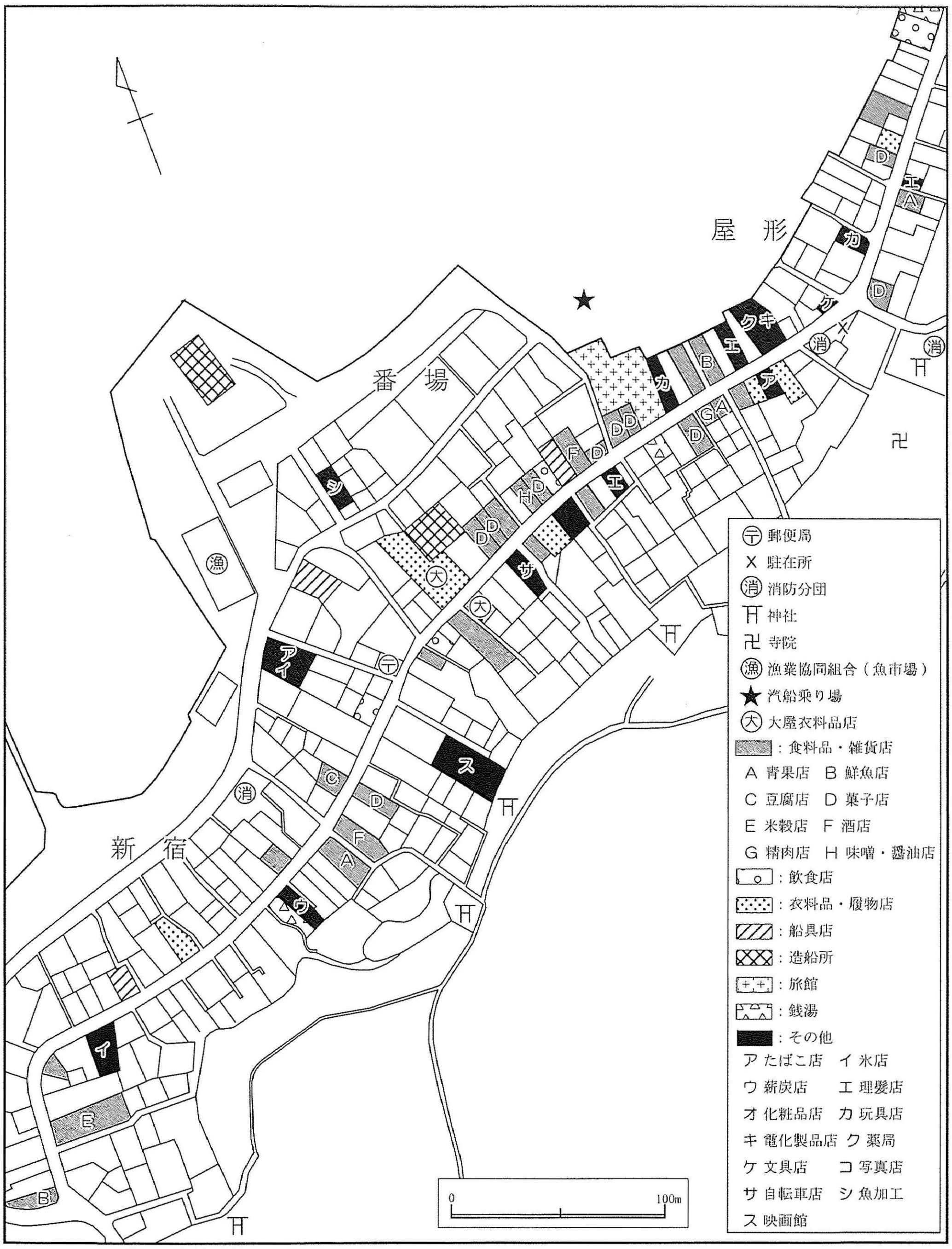
（『郷土資料』により作成）

に郵便取扱所が設置され[45]，また長井町役場・駐在所のほか，大正15年（1926）までは関東興信銀行長井支店が営業していた。さらに，屋形・番場の背後に位置する台地上には小学校・中学校が立地しており，長井地区全体に関わる中心的な機能や施設が，番場周辺に集積していることがわかる。

漁業根拠地としての機能は，大正12年（1923）に村営の魚市場を番場に設置したものの，これが同15年（1926）の大火によって焼失した後は，昭和10年（1935）に完成した新宿船溜場に隣接する形で，同15年（1940）に町営の魚市場を新宿の埋立地に設けた。新たに屋形湾に開港した現在の長井漁港は，同42年（1967）に完成したものである。大正期・昭和初期における魚市場の設置は，番場や新宿といった沿岸部の字が，長井地区における「中心市場」・「商業の中心点」として位置づけられる1つの重要な要素となった[46]。

3）昭和初期から昭和30年代における屋形・番場・新宿の景観

第5図は，昭和初期から昭和30年代の屋形・番場・新宿における商店の分布を示したものである。ここから，当時最も活況を呈し，長井地区のメインストリートとされた港町の様相を描き出してみたい。



第５図　屋形・番場・新宿における商店の分布－昭和初期～昭和30年代－
（『横須賀市明細地図　南部版（1962版）』および聞き取りにより作成）

a. 買い回り品店

買い回り品店については，呉服や洋品，草履を扱う衣料品・履物店が6軒，船具店が2軒，化粧品店や文具店，写真店，玩具店，電化製品店，自転車店が各1軒など，多様な業種が確認できる。このうち，近世以来の老舗である番場の大屋衣料品店は，第二次世界大戦以前においては箪笥・布団・鍋などの嫁入り道具を扱い，長井地区に限らず衣笠や佐島からも客を集めていた。同店は第二次世界大戦中には軍によって店舗が接収され一時休業となったが，その後昭和27年（1952）に営業を再開し，このときは蔵を店舗として手拭いなどを扱っていた。昭和35年（1960）に店舗を改築し，その後は洋服・反物・足袋・モンペなどを販売しており，佐島や三崎からも客が訪れていた[47]。

b. 最寄り品店

食料品店や雑貨店は30軒確認できる。取扱品目を特定できる商店は少ないが，聞き取りによって，食料・乾物・米穀・日用雑貨などを扱う，いわゆる「よろず屋」が3軒存在していたことが確認できる[48]。菓子店は最も多く9軒あり，このうちには駄菓子のほか，佃煮やおでん，天ぷらを専門的に販売する商店も存在した。ほかに青果店3軒，精肉店・鮮魚店・豆腐店は各1軒であるが，屋形の鮮魚店山正や新宿の豆腐店は，長井地区の各字や周辺地区への行商も行っていた。

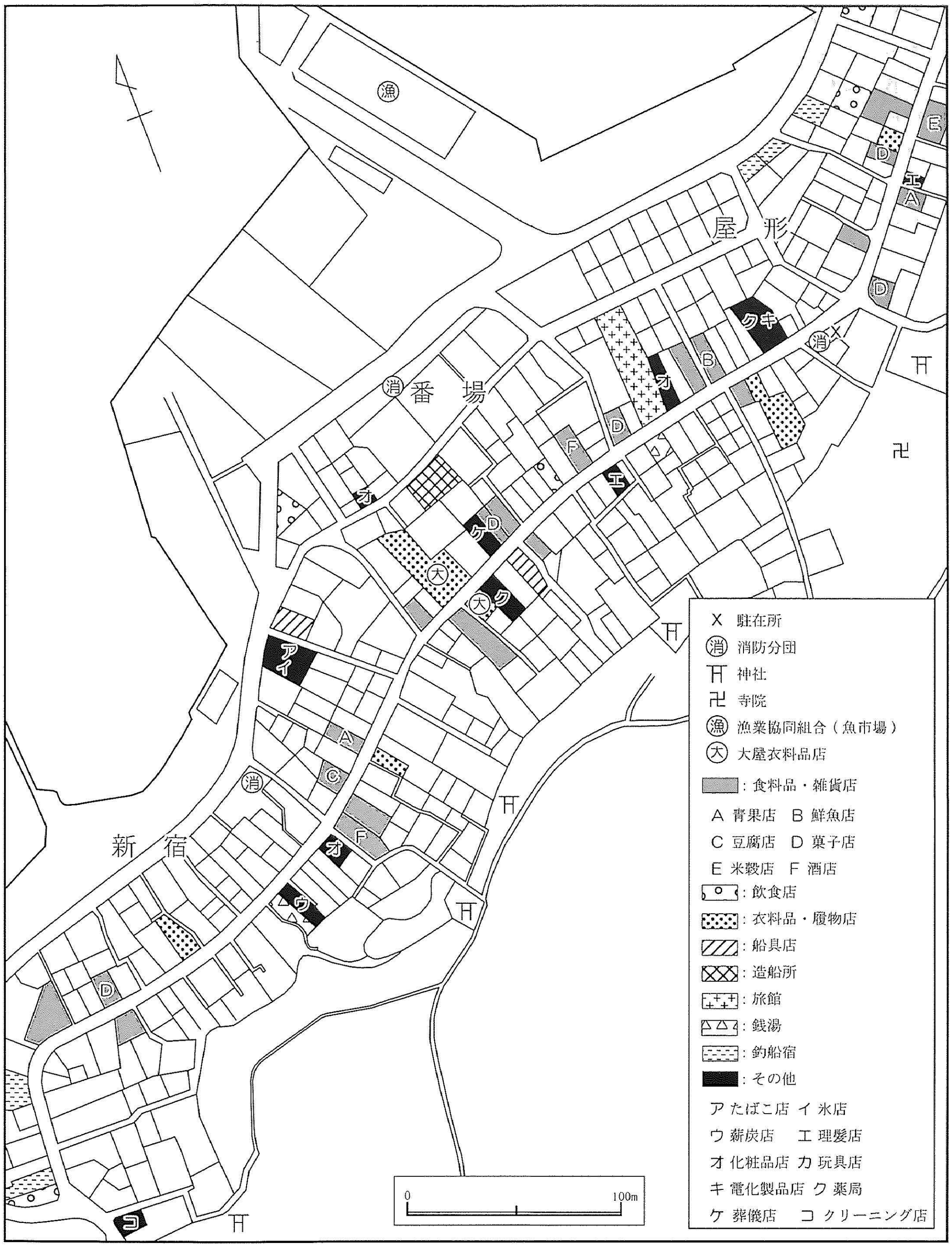
c. 接客業

番場の清水屋旅館は料亭を兼ねた宿泊施設であり，遠方からの文人や行商人などが逗留していた。理髪店は3軒と比較的多くみられるが，なかでも，丸髷を結う技術を持つ新宿の店舗には，衣笠や横須賀など遠方からも髪を結いに来る女性が昭和30年代までは存在したという[49]。飲食店は3軒あり，このうち昭和元年（1926）に新宿に開業したカフェー昭和亭は，長井地区で初めて洋食を扱った食堂であり，主な利用客は長井地区の漁家や農家であった[50]。これらに加え，新宿の映画館遊楽館の存在は，当時の賑わいをうかがわせるものである。また，港町における特徴的な業種といえる銭湯は，屋形・番場・新宿に1軒ずつ立地している。その利用者は周辺住民のほか，長井の漁港に寄港する漁師も含まれていた。銭湯は，漁家の情報交換の場としても機能しており，自宅に風呂を持つ近隣の漁家であっても，銭湯を利用することがあった[51]。

それでは，長井地区内の住民は上述の商店をどのように利用していたのか。聞き取りに基づきながら，沿岸に位置し番場周辺の港町と隣接する漆山・荒井と，内陸に位置する大久保の住民の利用形態について検討してみよう。食料品などの最寄り品については，先に鮮魚店・豆腐店による行商の存在を述べたが，昭和40年代には漆山の旅館相模屋でも薪炭や米穀・味噌・醤油などの販売・配達を行っていた。大久保でも魚・野菜を取り扱う行商が利用されていたが，そのほかの日用品については，主に大久保・井尻周辺の商店で購入していた。

買い回り品である訪問着などの衣料品については，荒井では昭和40年代には衣料品を扱う行商人が月1回程度訪ねて来たため，普段着はここで購入したが，番場・新宿の衣料品店で衣服を仕立てることもあったという[52]。一方，大久保では人寄せの際には屋形まで買い出しに行くこともあったが，盆暮れの買い回り品の購入の際には，路線バスを利用して横須賀まで出かけていた[53]。

以上のことから，少なくとも上述の3つの字においては，食料品をはじめとする日用品を求めて，日常的に屋形・番場・新宿を訪れていたとはいい難い。主な利用形態としては，飲食店や映画館の利用，買い回り品の調達や，家庭用冷蔵庫に用いる氷を購入するため，新宿の旧魚市場で営業していた氷屋を利用するというものであった。これらを勘案すると，屋形・番場・新宿の最寄り品店の利用者としては，屋形・番場・新宿の居住者や寄港した漁家などが考えられる。



第６図　屋形・番場・新宿における商店の分布－昭和61年（1986）－
（『横須賀市明細地図　西部版（1986版）』により作成）

4）昭和60年代における屋形・番場・新宿の景観

第６図は，昭和60年代における屋形・番場・新宿の商店の分布を示したものである。昭和60年代になると，食料品店や雑貨店は21軒に減少している。昭和30年代に９軒確認できた菓子店は，昭和50年代までは盛況であったといわれるが[54]，昭和60年代には４軒に減少し，そのほかの店舗も様々な品目を扱う「よろず屋」的な性格を強めていった[55]。また，清水屋旅館はホテル荒崎と改称し，映画館は昭和30年代までは営業していたが，昭和60年代までには姿を消している。

各種の商店が減少する中にあって，飲食店が５軒に増加している点が注目される。その多くは旧来のメインストリートであった旧道から，埋立地に建設された新道へ移動し，鮮魚店から寿司屋へ業種を変更した商店もみられる。さらに，新たな業種として，海岸沿いの埋立地に５軒の釣船宿が確認できるが，新道沿いにおける飲食店の増加は，釣船宿を利用する観光客の増加とも密接に関わっているものと考えられる。

すなわち，屋形・番場・新宿では，昭和60年（1985）頃までに新道を中心として観光地化が図られ，それまで番場周辺の旧道沿いでみられた金融機能や商業機能は，郵便局が新宿から仮屋ヶ崎へと移転したことに象徴されるように，小田和湾沿岸の新興住宅地へと移動したのである。その背景として，昭和33年（1958）には松ヶ崎に県営住宅が完成し，昭和56年（1981）には仮屋ヶ崎に市営住宅が建設されるなど，小田和湾沿岸で住宅地化が図られた。そして，人口増加が著しく生じたことに伴い，駐車場を併設するチェーン店，コンビニエンスストアなどの立地がみられるようになった。すなわち，旧来の商業中心地である屋形・番場・新宿は，長井地区内部における中心地としての金融・商業機能を低下させ，その結果，飲食店や釣船宿に代表される観光業の色彩を強めていったと推察できる。

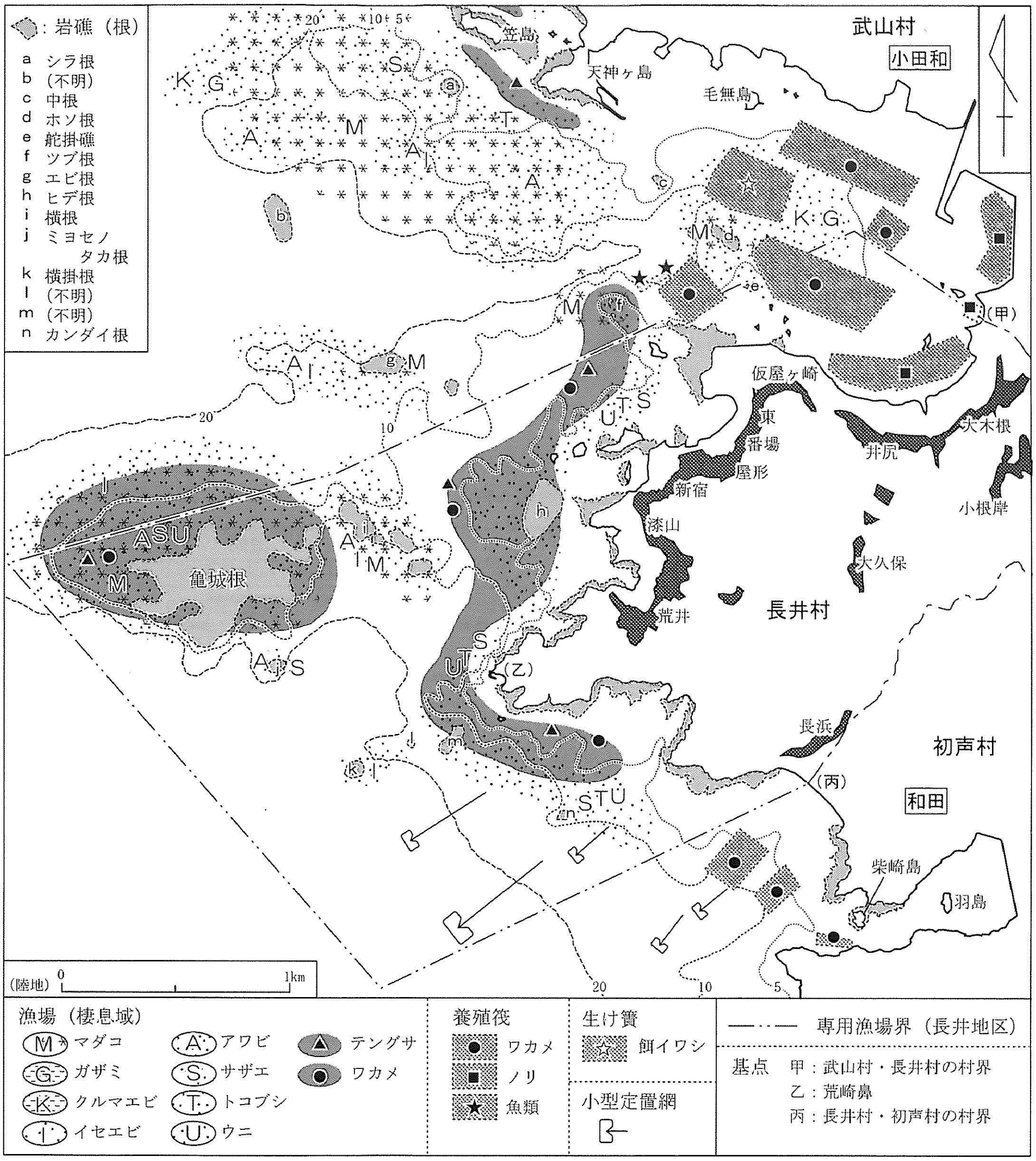
以上の検討から，屋形・番場・新宿の商業機能の性格とその集客圏について，次の点が指摘できる。第二次世界大戦以前には，大屋衣料品店に代表されるように，買い回り品を求めて衣笠・佐島・三崎などからも顧客が集まっていた。第二次世界大戦中には軍需施設・軍需工場が設置されたことに伴い，兵隊や労働者といった新たな利用客が訪れ，さらなる賑わいがみられたことが推定される[56]。第二次世界大戦後においても，盆暮れには初声・武山・大楠から多くの客が集まってきていた[57]。

とりわけ，町場の至近距離に位置する魚市場の存在は，港町長井の漁船の寄港地としての性格を強めた。つまり，広域におよぶ他地域の漁船が長井港に漁獲物を水揚げし，その乗組員が食料の調達，銭湯の利用などを目的として，番場周辺のメインストリートを訪れるというように，広域的な集客圏が形成されていたのである。このことは，港町という性格を持つ沿岸部の盛衰が，漁業のそれと密接に関連することを示しているといえる。次章では，長井地区の漁業に着目し，その諸特徴や変遷について検討することにより，港町長井のさらなる一面に迫ることとしたい。

Ⅳ　長井地区における漁業の特性とその変遷

1）漁場と漁法の多様性

三方を海に囲まれた長井地区の地先海域は，変化に富んだ多様な海底地形を有している。第７図は，明治41年（1908）の「長井村漁業組合専用漁場免許状[58]」および昭和54年（1979）の『組織的調査研究活動推進事業報告書[59]』をもとに，長井地区の地先海域における漁場の分布を示したものである。明治期における長井地区の専用漁場は旧長井村と旧武山村および旧初声村との村境を基点とし，荒崎沖の良好な岩礁である亀城根を包摂するようにして設定されていた。この亀城根は，「長井は其の地先に亀城根の暗礁遠く斗出し，其の北側には小多(ママ)和湾を控え，魚群の来遊多く漁業上頗る有利の地位を占むる[60]」とあるように，古くから良好な漁場として知られていた。また亀城根の周辺に分布するエビ根や横根といった岩礁はアオリイカの好漁場であり[61]，地先海域の水深



第７図　長井沿岸海域における漁場の分布と専用漁場の範囲
（『組織的調査研究活動推進事業報告書』および「明治41年　長井村漁業組合専用漁場免許状」により作成）

５メートル付近に帯状に分布するツブ根やヒデ根などでは，テングサやワカメの採藻や，サザエ・トコブシ・ウニなどを対象とする覗突漁が行われていた。亀城根周辺の海域は，第二次世界大戦以前，要塞地帯として漁業禁止区域に設定されたため，漁業資源が保護される結果となり，昭和40年代半ばまで漁獲量が豊富な好漁場であった[62)]。このように多くの岩礁が分布し，多彩な漁獲物の棲息に適した地先海域の存在は，長井地区において古くから沿岸漁業が発達した基盤であり，このこ

とが四組問屋への鮮魚供給拠点化や多様な漁法の発達においても，重要な条件であったと考えられる。

またⅡ-2）ですでに触れたように，所有耕地の多寡などの違いが，字ごとの漁業への依存度や漁法に違いを生じさせており，このことが長井地区全体としてみた場合の，漁法や漁獲物の多様性を付与している側面がある。例えば，屋形湾や新宿湾を根拠とする東・屋形・番場・新宿などの各字では，一本釣りや延縄といった釣りを主体とする漁家が大多数を占めていた。これに対して，漆山湾や荒井湾を根拠とする漆山・荒井の各字では，刺網などの網漁を主体とする漁家が多かった[63]。

漁港整備以前の屋形湾においては，小型船は番場地先の砂浜に陸揚げしており，主にイカやサバ釣りが行われていた[64]。大正期における長井村の漁業について示した第6表によれば，長井地先海域での覗突漁や，亀城根のイカ釣りなどの沿岸漁業を主体としつつも，三崎沖でのサバ釣りや相模湾沖でのカツオ延縄漁などの沖合漁業も盛んに行われていたことがわかる。前述したように，大正12年には番場に村営魚市場が設置され，漁業の根

第6表　大正期における長井地区の漁業－大正11年（1922）頃－

漁場	魚種	価格（円）	数量（t）	漁法	漁期 1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
長井地先	ワカメ	15,000	187.5	覗突			━	━	━	━	━					
	イセエビ	15,000	11.3	刺網	━	━	━	━	━			━	━	━	━	━
	テングサ	10,000	123.8	覗突				━	━	━	━	━	━	━		
	アワビ	5,000	7.5	覗突・潜水器	━	━	━	━	━	━	━	━	━	━		
	ボラ・アジ	3,000	7.5	巻網	━	━	━	━							━	━
	ウルメイワシ	1,500	3.1	地曳網					━	━	━	━				
	タコ	1,500	2.8	曳釣・タコツボ	━	━	━	━	━	━	━	━	━	━	━	━
	クルマエビ	1,000	0.4	刺網・平繰網					━	━	━	━				
	ノリ	200	1.5	摘採			━	━	━	━						
	小計	52,200	345.3													
亀城根	ヤリイカ・スルメイカ	30,000	56.3	ビシ釣	━	━	━	━	━	━	━	━	━	━	━	━
	ヒラメ	4,500	5.6	テンテン釣・刺網		━	━	━	━	━						
	イサキ	3,000	5.6	ビシ釣					━	━	━	━	━	━		
	アマダイ	3,000	2.3	延縄								━	━	━	━	━
	カマス	2,500	6.2	ビシ釣							━	━	━	━		
	沖キス	2,250	4.2	延縄	━	━	━	━	━					━	━	━
	ホウボウ	2,000	3.8	延縄	━	━	━	━	━	━	━	━	━	━	━	━
	ゴトイカ	2,000	3.8	曳縄釣							━	━	━	━	━	━
	カサゴ	1,500	3.8	延縄	━	━								━	━	━
	キス	500	3.8	延縄						━	━	━				
	小計	51,250	95.2													
三崎沖	サバ	30,000	75.0	ビシ釣・カッポリ・延縄	━	━	━	━	━	━	━	━	━	━	━	━
	ソウダガツオ	12,000	30.0	竿釣・ビシ釣						━	━	━	━	━	━	━
	サケ	12,000	30.0	竿釣・ビシ釣						━	━	━	━	━	━	━
	ムツ	2,000	18.8	ホウゼ釣	━	━	━	━	━					━	━	━
	小計	56,000	153.8													
相模湾	カツオ	15,000	28.1	延縄		━	━	━	━	━	━	━	━	━	━	━
	マグロ	2,000	1.9	延縄・曳縄	━	━	━	━	━	━	━	━	━	━	━	━
	カジキ	2,000	1.7	突棒					━	━	━	━	━	━	━	━
	トビウオ	1,500	5.6	流網					━	━	━					
	サンマ	100	0.4	流網	━									━	━	━
	小計	20,600	37.7													
	合計	180,050	631.9													

（竜崎知治氏所蔵「漁業一覧表」により作成）

拠地化が進むこととなった。その後，昭和10年（1935）には新宿湾に船溜場が完成して大型船の停泊が可能となり，第二次世界大戦後には，10～20トン級の漁船によるサバ釣漁が盛んに展開するようになった[65]。

2）漁業変化の画期としての高度経済成長期

好漁場に恵まれた地先海域の下で展開してきた長井地区の漁業は，高度経済成長期を画期として変化を遂げる[66]。第8図は，昭和38年（1963）および昭和58年（1983）・平成15年（2003）の『漁業センサス[67]』をもとに，第二次世界大戦後の三浦半島北・中部を占める横須賀市・逗子市・葉山町における，各漁業組合の経営体の種類および漁船数や漁法の推移を示したものである。

長井地区に着目してみると経営体数は昭和38年には226であり，三浦半島北・中部の中で際立って多い。このうち個人経営体数は225であり，兼業漁家が約8割を占めていた。同58年になると，経営体数は308と増加しているが，これは会社など個人以外の経営体数19を含んでいた。同年における個人経営体数は289であり，そのうち兼業漁家は約9割となっていた。昭和38年から同58年の20年間にかけて，三浦半島北・中部の他地区における経営体数は減少傾向にあったが，長井地区では経営を兼業化する漁家が増加しつつも，経営体数が維持されていたことがわかる。

次に漁船の保有状況をみると，昭和38年時点で，定置網漁や養殖業を除いて漁船を保有する経営体は205であった。このうち5トン以上の動力船を保有する経営体数は13で，これは神奈川県下では三崎町に次いで多かった。その一方で，無動力船もしくは1トン未満の動力船を保有している経営体が約6割を占めていた。三浦半島北・中部では昭和38年から同58年にかけて，5トン以上の動力船を保有する経営体が増加し，無動力船または1トン未満の動力船を保有している経営体が大幅に減少する傾向にあった。このことは，経営体数の減少とともに，大型漁船への収斂が進んだことを示している。長井地区では，昭和38年にはみられなかった20トン以上の動力船を保有する経営体が現れており，三浦半島北・中部の中でも，とくに漁船の大型化の傾向が強かったといえる。

昭和32年（1957）の「長井港所属動力船名簿[68]」によれば，当時，長井漁港に所属していた漁船は，そのほとんどが5トン未満の動力船であった（第7表）。なかでも1トン未満のものが最も多く，全体の約5割を占めていた。5トン以上の動力船は10隻であり，これらの所有者は屋形・番場・新宿・漆山に集中していた。前述の通り，長井地区は昭和38年の時点で三崎町に次いで漁船の動力化が進んでいたが，大型動力船の所有者は特定の字に偏在していたことがわかる。これらの字の中でも，新宿と漆山では漁船数がとくに多く，新宿ではほかの字に比べて1トン未満の漁船が占める割合が小さい点が特徴的である。また漆山では3トン未満の漁船が約9割を占めており，長井地区では1隻のみであった20トン以上の動力漁船は，漆山の漁家が所有するものであった。

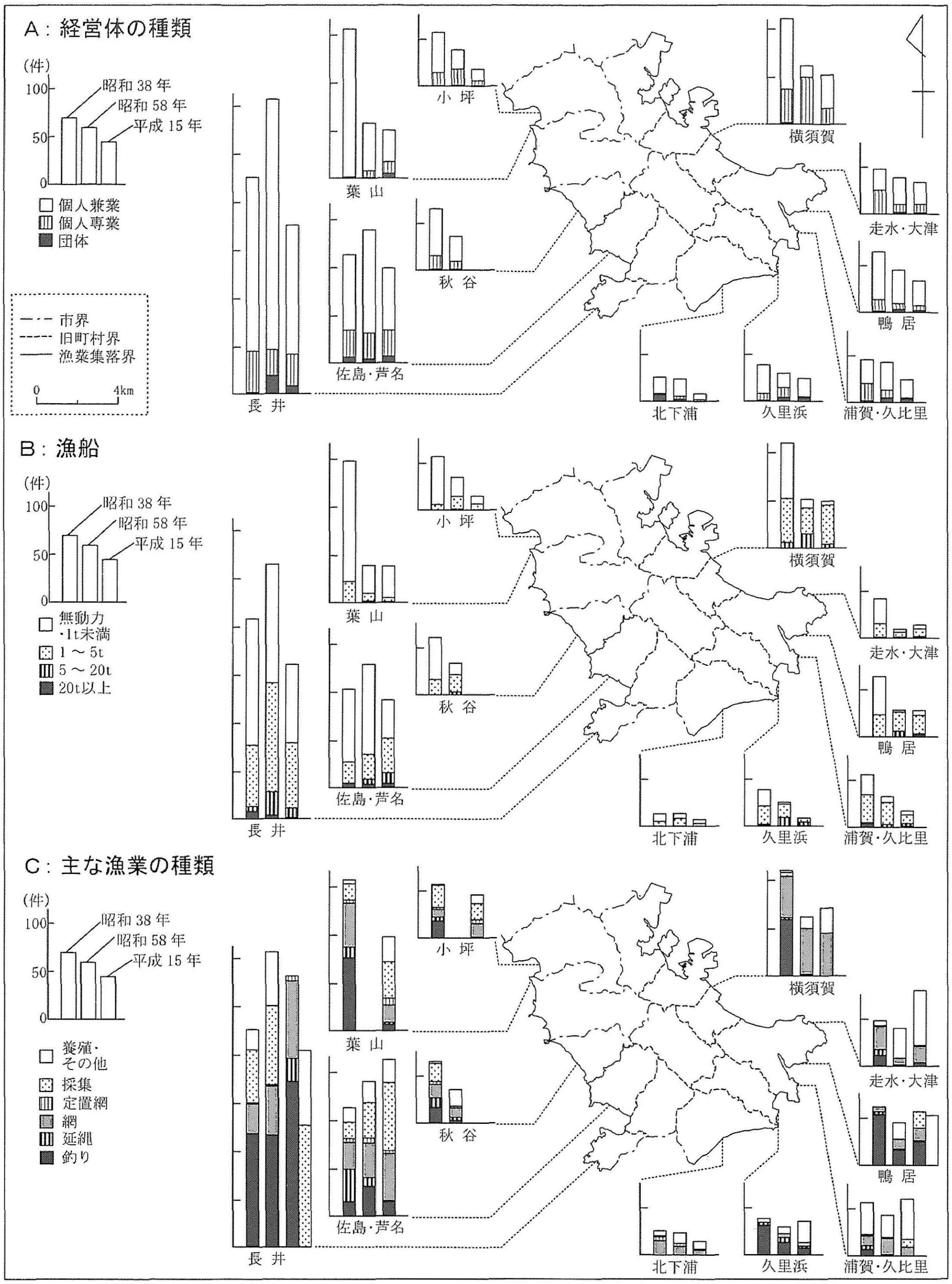
次に漁業の種類をみると，長井地区では他地区と比べて釣りの占める割合が高い点が際立っている（第8図）。また昭和38年から同58年にかけての推移をみると，長井地区および走水・大津地区をはじめとして，三浦半島北・中部では養殖業を主とする経営体数が増加する傾向にあった。長井

第7表　長井地区における字別動力漁船数
－昭和32年（1957）－

（単位：隻）

字	～1t	1～3t	3～5t	5～10t	10～20t	20t～	合計
大木根	1	2	－	－	－	－	3
井　尻	2	－	－	－	－	－	2
東	7	4	－	－	－	－	11
屋　形	4	3	－	1	1	－	9
番　場	7	5	－	－	1	－	13
新　宿	7	18	3	2	2	－	32
漆　山	20	13	－	－	2	1	36
荒　井	9	3	1	－	－	－	13
合　計	57	48	4	3	6	1	119

（「昭和32年動力漁船名簿」により作成）



第８図　第二次世界大戦以後の横須賀市・逗子市・葉山町における漁業の変化－昭和38年（1963）・昭和58年（1983）・平成15年（2003）－
（『第３次漁業センサス第３報　市町村別統計　第３分冊』，『横須賀の漁業　第７次漁業センサス結果』，『横須賀の漁業　2003年漁業センサス結果報告』により作成）

地区では，昭和38年の時点でノリ養殖を主とする経営体数が16あり，三浦半島北・中部の中でも早い時期から養殖業が盛んとなったことがわかる。

以上のように，長井地区の漁業は，昭和38年から同58年の20年間で様々な面において急激に変化していた。以下に示す昭和44年（1969）の新聞記事[69]は，三浦半島の漁業が昭和40年代に入って著しく変化していた状況を物語っている。

> 三チャン漁業　漁業基地三崎をはじめ，相模湾一帯の住宅地化，観光地化は浜の若者の気質を変え，父の跡とりにソッポを向くようになってしまった。これだけなら現状維持ですむが，働き盛りの漁師まで京浜地帯の工場に勤めるようになると，業界の人手不足はさらに拍車がかけられる。（中略）県立三崎水産高の卒業生が地元に残らず観光船や貨物船の乗組員になるという珍現象，これらひとつひとつにも“斜陽漁業”の姿がうかがわれる。

この記事によれば，三崎町域をはじめとして相模湾沿岸一帯の住宅地化や観光地化が進み，そのことから漁家の若年層が家業を継がなくなったこと，さらには，現役の漁師までもが京浜工業地帯の工場へ就業するようになったことなど，漁業離れが進んでいる状況がうかがえる。この記事により，神奈川県下最大の漁業地域である三浦半島全体として，昭和44年当時，漁業が急速に衰退している様子が確認できる。こうした状況の下で，長井地区の漁業にはどのような変化がみられたのであろうか。

第８表は昭和43年（1968）の長井地区における漁業協同組合員数を示したものである。組合員数が最も多い字は漆山の171人で，これに次ぐ字は新宿の137人であった。これらの字では，正組合員が約８割を占めており，また年齢別では50代以下の組合員が約３割と比較的高い割合を占めている。これに対し，小田和湾に面した大木根・井尻は組合員数が少なく，ほかの字に比べて准組合員数の比率が高い。昭和38年から同43年にかけて行われた組合員資格の変更をみると，いずれの字においても，准組合員から正組合員へ昇格した者は少なく，正組合員から准組合員へ降格，もしくは

第８表　長井地区における字別組合員数－昭和43年（1968）－

（単位：人）

字	計	昭和43年組合員数						昭和38年からの変更							
		資格別		年齢別				名義変更				資格変更			
		正組合員	准組合員	〜29歳	30〜49歳	50〜69歳	70歳〜	〜29歳	30〜39歳	40歳〜	変更なし	昇格（准→正）	降格（正→准）	脱退	変更なし
大木根	14	7	7	1	5	7	1	－	－	－	14	－	1	1	12
長浜	13	3	10	－	1	10	2	－	2	－	11	－	－	－	13
井尻	28	17	11	1	9	12	6	－	4	－	24	2	－	2	24
仮屋ヶ崎	32	15	17	－	15	12	5	3	2	－	27	3	4	1	24
東	30	16	14	－	7	15	8	－	1	1	28	1	3	3	23
屋形	35	23	12	1	4	27	3	2	2	3	28	1	6	5	23
番場	54	43	11	－	11	31	12	－	6	5	43	1	6	2	45
新宿	137	120	17	4	43	72	17	5	12	5	115	2	13	6	116
漆山	171	131	40	5	58	88	20	6	14	13	138	2	12	8	149
荒井	48	41	7	3	11	29	5	－	1	4	43	－	4	－	44
合計	562	416	146	15	164	303	79	16	44	31	471	12	49	28	473

（「昭和43年組合員名簿」により作成）

組合員から脱退した者の方が多い。このことは，先述の昭和44年の新聞記事が示すような漁業の衰退傾向が，長井地区においても進行しつつあったことを示していると考えられる。

3）高度経済成長期以降における漁業の新たな展開

長井地区では，字ごとに特徴的な漁法がみられたが，昭和40年代の転換期を経ると，そうした字ごとの特徴に対応するようにして，長井地区における漁業は新たな展開をみせることとなった。

a. 沖合漁業への特化

長井地区では昭和28年（1953）には韓国済州島への出漁を開始する[70]など，すでに漁場の広域化が進んでいた。その後，漁船の動力化・大型化や，昭和30年代における漁港施設の整備により，新規漁場の開拓がさらに進展した。昭和40年代に入ると，旋網や三枚網・地獄網漁といった新たな漁法が開発され，漆山や荒井では，この時期以降に刺網漁が盛んに行われるようになった。また，サバ釣漁が盛んに行われていたが，この時期からは大型船によるサバのたもすくい漁が行われるようになった[71]。こうした新たな漁法により，漁獲量は一時的に増加したものの，漁業資源の枯渇が問題となった。

第9図は，昭和54年（1979）の『組織的調査研究活動推進事業報告書[72]』と聞き取りにより，相模湾から伊豆諸島沖における漁場の分布を示したものである。このうち昭和50年代には，相模湾沖合の水深500～600メートル付近に生息するアカザエビやタカアシガニの漁場が開発され，これらを捕採するための籠網漁という漁法が考案された。このほか，伊豆稲取沖のキンメダイ釣りや，八丈島沖のハタ・タカベ・シマアジなどを対象とする根釣りなどの新たな漁場が開発された[73]。

b. 遊漁釣船業の増加

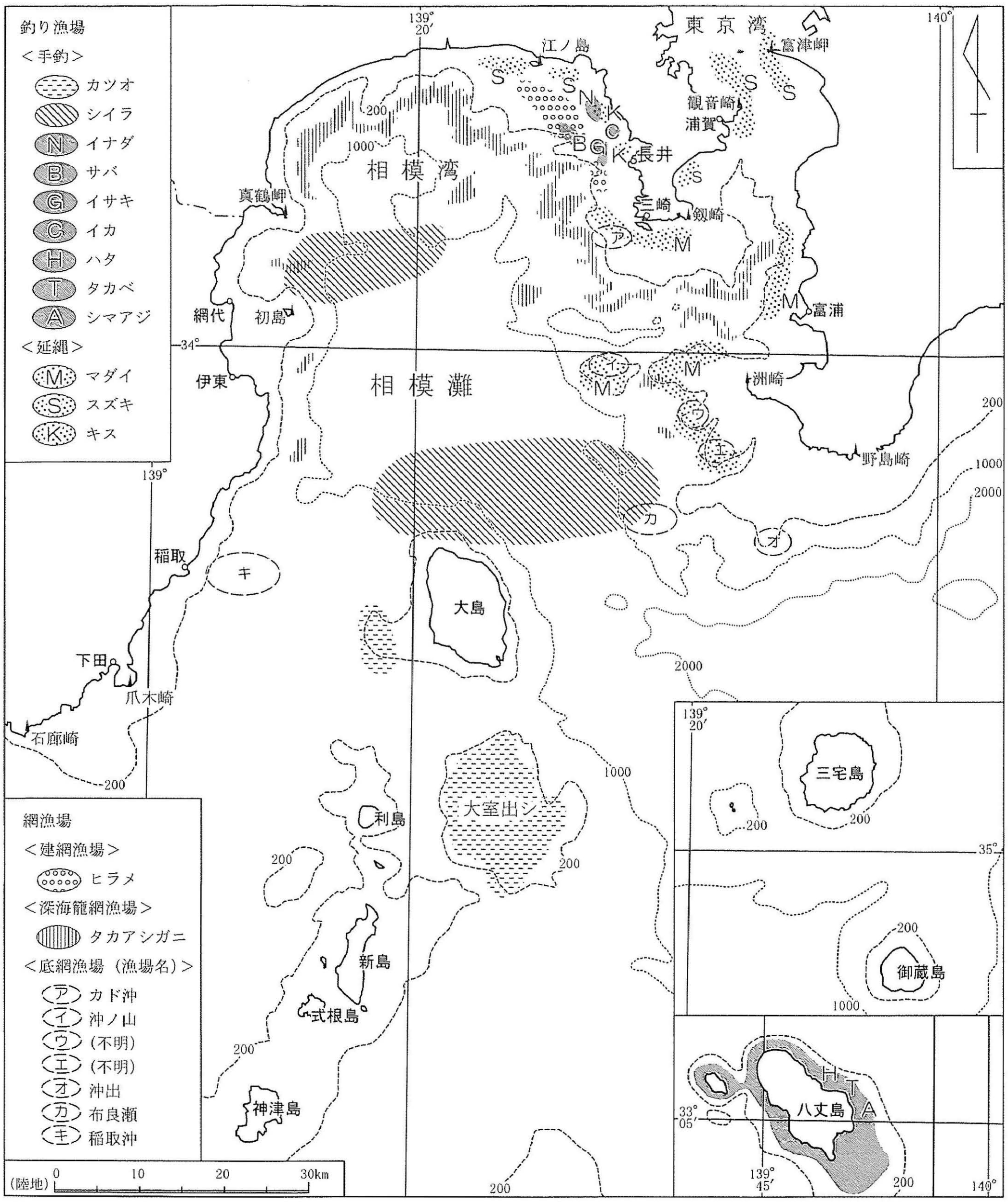
昭和40年代以降における漁業の兼業化に伴い，遊漁釣船業の導入が進行したことも，長井地区の大きな特徴の一つといえる。すでに昭和39年（1964）には，長井町漁業協同組合が神奈川県漁業調整委員会に対して，遊漁釣船業者による乱獲を防止すべく，以下のような陳情書を提出している[74]。

御承知の通り，近年沿岸漁業，特に一本釣り漁業は不漁続きにて漁獲高は日々に減少して行く有様です。又時期的には三枚網漁業者が乱獲する為に，資源の枯渇を見て居る有様です。又夜間の操業及び時期的の操業を禁止致して，保護育成を計り居る現状であります。然乍最近は時期をも考えず乱獲を致し居る次第で有ります。又本職の漁業者を妨げ居る有様で，釣船対本業船は刻々と対立が烈しく成る現状で有ります。以上の様な状況で有りますので，根付魚資源の保護上，操業区域の制限の取締方を御願い致，此段申請申上ます。

これによれば，昭和39年当時，釣船業者や三枚網業者の乱獲により漁業資源の枯渇が生じていること，そのことが原因で一本釣り漁は不漁続きであることがわかる。これらの点を要因として，昭和40年代以降の遊魚釣船業の増加や漁業の兼業化が進展したことが指摘できる。

第9表は，『三浦半島の遊漁業[75]』をもとに，昭和50年（1975）における長井地区の遊漁釣船業の推移を示したものである。同年の長井地区における遊漁業経営体数は135，保有漁船隻数は158隻であり，三浦半島内では突出した数である。開業年別の経営体数をみると，長井地区では昭和39年以降に開業した経営体数は113であり，当時の経営体数の8割以上を占めている。三浦半島の他地区をみると，東京湾沿岸の金田湾や松輪でも同様の構成比となっているが，相模湾沿岸の城ヶ島や小網代では昭和38年以前に開業した経営体が大部分を占めている。

また従事する漁業種別経営体数をみると，長井地区ではイカ釣りや刺網と組み合わせて遊漁釣船業を営む経営体が多数を占めていることがわか



第９図　相模湾・相模灘および伊豆諸島沖における漁場の分布
（『組織的調査研究活動推進事業報告書』および聞き取りにより作成）

る。漆山は新宿とともに，漁船の動力化などの設備投資をいち早く充実させた漁家の多い字であったが，刺網との組み合わせによる遊漁釣船業への転業が盛んであった。先に示した第６図によれば，昭和60年代には，屋形・新宿に５軒の釣船業者・釣船宿が確認できる。また図郭外ではあるが，漆山でも昭和30年代にはみられなかった釣船業者・釣船宿が６軒確認できる。このように遊漁

第９表　三浦半島の地区別遊漁業経営状況－昭和50年（1975）－

地区	経営体数（軒）										保有隻数（隻）	年間遊漁者数（人）
	計	開業年別			従事する漁業種別							
		～S38	S39～43	S44～48	いか釣	さば釣	刺網	養殖	採貝・採藻	その他		
長井	135	22	33	80	62	6	22	16	18	9	158	36,876
松輪	59	2	36	21	1	9	1	1	12	30	63	7,711
城ヶ島	47	46	1	－	－	－	20	1	24	2	56	7,267
小網代	39	38	1	－	－	－	1	29	8	1	49	33,125
金田湾	39	5	25	8	－	－	6	25	6	2	43	5,052
秋谷	28	12	5	9	－	7	3	2	8	8	37	6,678
佐島	27	6	14	7	－	－	2	3	5	19	29	9,563
三崎	11	4	－	7	4	2	－	－	－	5	12	2,378
二町谷	11	1	1	9	9	－	－	－	2	－	11	1,155
初声	8	3	1	4	－	－	3	1	3	1	9	679
諸磯	4	2	1	1	－	－	1	2	1	－	6	913
上宮田	4	1	1	2	－	－	－	4	－	－	4	500
毘沙門	3	－	－	3	－	－	3	－	－	－	4	1,580
田中	2	1	1	－	－	－	－	－	－	2	2	124
向ヶ崎	1	－	－	1	－	－	－	－	－	1	2	1,040
合計	418	143	120	152	76	24	62	84	87	80	485	114,641

（『三浦半島の遊漁業』により作成）

釣船業の導入を契機として，屋形から漆山にかけての沿岸部では漁業の観光化が進んでいったものと考えられる。

c．養殖業の伸展

昭和38年から同58年にかけて，三浦半島では養殖業の増加が顕著にみられた（第８図参照）[76]。長井地区では，水深が浅い小田和湾において養殖業が盛んに行われている（第７図参照）。ノリの養殖は昭和27年（1952）から行われていたが，当初，相模湾沿岸ではノリの養殖は技術的に困難であるとされていた[77]。しかし，同35年（1960）にはノリの人工採苗が導入され，また同40年には計画生産が実施されたことにより，長井地区におけるノリの収穫量は増加した。冷蔵網を計画的に張り込んだことと，漁場に見合った網数を分析して減柵を実施したことが収穫量増加の要因であったという[78]。当時の新聞記事には，長井地区におけるノリの豊作に関する記事がしばしば掲載されているが，このことはノリ養殖業を導入した三浦半島一帯の中でも，とりわけ長井地区は好結果を収めたことを示しているといえよう。

小田和湾では，ノリ養殖業の導入後，昭和34年（1959）にはカキ，同37年（1962）には稚アユ，同38年にはイナダの養殖が相次いで開始された[79]。小田和湾に面した井尻は，動力漁船数や組合員数からみると，漁業への依存が比較的低いものの，同43年の時点で，正組合員が６割以上を占めるとともに，正組合員から准組合員へ降格する者もいなかった（第７表参照）。このことから，小田和湾における養殖業が，井尻の漁業経営を維持させていたとみなすことができる。

以上のように，長井地区の漁業は，高度経済成長期を画期として変化を遂げた。従来，長井地区では好漁場に恵まれた地先海域の下で字ごとに特徴的な漁業が展開してきたが，港町長井を構成する字では，釣りを主体とする漁業が営まれてきた。大正期には番場に村営魚市場が設置され，そ

の後，周辺には漁業根拠地としての機能が集積されていった。長井地区の漁家や，長井漁港を利用する他地域の漁家は番場・屋形・新宿の商店を利用し，港町長井の活況を支えていたといえる。そして高度経済成長期に入ると，漁業資源の枯渇や若年層の漁業離れによる漁業の不振に対応するようにして，長井地区における漁業は新しい展開をみせた。昭和40年代には遊漁釣船業を開業する漁家が多く現れたが，長井地区の中でも動力船の導入が早かった新宿や漆山でその傾向が強かった。これに伴って屋形から漆山にかけての沿岸部では釣船宿や飲食店の増加が目立つようになり，従来，商業機能を集積していた港町長井はその性格を変化させてゆくこととなった。

V　おわりに

本稿では，横須賀市長井地区の地域特性とその変遷について，とくに同地区の沿岸集落が持つ，在町としての機能や鮮魚供給地としての機能の変化に着目しながら考察を行った。その際，長井地区全体を漠然と「半農半漁村」として概括するのではなく，当地区を構成する字ごとの性格の違いに注目しながら，商業や漁業の展開を検討した。その結果は以下のように要約することができる。

三浦半島の藩政村は，複数の小集落を包摂している場合が一般的であるが，長井地区も例外ではなく，11の字から構成されていた。長井地区を構成する字は，領域の占拠形態や集落形態，生業構造などにおいて，様々なバリエーションをもっており，長井地区はいわば，多様な性格をもつ字の「複合体」であることが明らかとなった。このことは，三浦半島の村落の性格を検討する際には，これらの小集落レベルに分かれたデータを用いることが有効であり，また不可欠であることを示すものであろう。

長井地区を構成する字の中でも，相模湾沿岸の東・屋形・番場・新宿の4字は，街村状の集落形態をなし，在町的な性格と漁村的な性格とを併せ持ち，農業への依存度が極めて低い地区として位置づけられる。これらの字は，天然の良港に恵まれたこともあり，近世以来，屋形・番場を中心に北川屋に代表される大店をはじめ，各種商店，湯屋などが集積する町場を形成していた。この町場の規模や中心性は，三浦半島において浦賀・三崎に次ぐ位置を占めており，それゆえ長井は，三浦半島西海岸を代表する中心地であった。明治期以降，長井の町場は大火の発生などにより一時的に衰退するものの，行政施設や金融機関，各種の買い回り品店，娯楽施設，漁港などが集積して活況を呈し，昭和30年代頃まで一定の中心性を維持していた。

長井村の地先海域は，屋形湾・新宿湾・漆山湾・荒井湾など，港の立地に適した湾入部がいくつも存在すること，亀城根をはじめとする大小の岩礁（根）の存在が，各種の定着魚に加え，マダコ・クルマエビ・イセエビ・アワビ・テングサといった多様な魚介類の棲息に好適なことなどの自然条件に恵まれていた。このような豊度の高い地先海域の存在が，上記の4字や漆山・荒井・仮屋ヶ崎の各字に，釣りをはじめとする漁撈や操船の技術を具えた専業的な漁家の成立を促し，長井村の浜方は，江戸への鮮魚供給機能を高めていった。

それではなぜ，長井村に高次の中心性をもつ町場が形成されたのであろうか。その最大の理由は，長井村が有した江戸への鮮魚集出荷拠点として高い機能を保持していたことにほかならないであろう。江戸の都市的成長により，三浦半島沿岸一帯は，江戸日本橋魚問屋の仕入漁村に編成され，江戸地廻り経済圏の中で鮮魚供給地としての機能を強めていった。このことは，三浦半島の村落にとってみれば，鮮魚こそが江戸との経済的な結びつきをもつ契機となり，貨幣経済の浸透を促す最大の商品であったことを示している。それゆえ江戸魚問屋と漁師との間を取り持つ在地の魚商が集積する鮮魚集出荷拠点こそが，当該地域の商業機能の集積や町場の発展の基盤として重要な役割を果たしたものとみられる。本稿では長井村の魚商の具体像については，資料的な制約もあって提示することはできなかった。しかしながら，江戸日

本橋の魚市場の中でも最古参の四組問屋に加え，四日市干物問屋らが熊野神社の石垣の寄進者に名を連ねていた事実は，長井村の鮮魚集出荷拠点としての機能の高さを示しているといえよう。

江戸の魚問屋が仕入漁村の神社へ寄進した例は，長井村以外では，三崎の海南神社へ新肴場魚問屋が灯篭を寄進した例が報告されている[80]。長井港が押送り船の保有数において，三崎港に次いだ地位にあったことなども勘案すれば，長井村と三崎町はそれぞれ，四組問屋と新肴場の仕入漁村を代表する存在であり，他の仕入漁村よりも高い鮮魚供給機能を集積した，鮮魚供給拠点であった。こうしてみると，長井港と三崎港は，港町形成の契機が鮮魚流通拠点であったことに加え，鮮魚以外の諸物資の集散地となり，商港としての性格を強めていったこと，産業革命期以降における漁港漁業・漁船漁業時代の到来に合わせて魚市場を設置し，漁業根拠地化して漁港としての性格を強めていったこと，その一方で高度経済成長期以降，資源枯渇や漁業離れによって沿岸漁業が不振となり，港の在町としての機能や活気を弱めていくこと，また遊魚釣船業への転業が盛んとなり観光地的な性格を強めていくことなど，その変遷過程において多くの共通点がみられる。三崎の場合，マグロ遠洋漁業の根拠地化の波及効果が，単なる沖合漁業根拠地のそれとはスケールが異なるものであったことを考慮しなければならないが，以上のような在町の変遷過程は，三浦半島の中心地形成に共通する要素として特筆できるのではないであろうか。

本稿では，長井地区の中でも港町を構成した字を中心に，漁業と商業の歴史的変遷に着目して検討を進めてきた。その際，以下の点が，今後取り組むべき課題として指摘できる。一点目は，中世・中近世移行期における開発や集落形成の過程を，近隣の地区も視野に入れつつ[81]，明らかにすることである。この点は，資料の存否に制約を受けざるを得ない面が大きいが，この点を踏まえることにより，字ごとの性格が大きく異なる長井地区の耕地と集落の占拠形態や生業選択について，歴史的な背景を踏まえた考察が可能となるであろう。二点目は，本稿で提示した字レベルの分析を踏まえ，農業・漁業などを組み合わせた生産暦や家族内分業の実態を，家レベルまで掘り下げ，より詳細な分析を行うことである。そのことにより，「半農半漁村」と一括されがちな個々の地域の特性を，一層鮮明に提示し得るであろう。これらについては，他日を期したい。

付　記

本稿の作成にあたり，横須賀市長井地区の竜崎知治氏には，所蔵資料の閲覧・撮影のご便宜をはじめ，多くのご教示を賜りました。また，横須賀市自然・人文博物館学芸員の安池尋幸先生や，辻井善弥先生，久保木　実先生には，多くの資料の提供とご教示を賜りました。さらに，長井地区の穐本敬一氏・大久保了徹氏・岡田徳夫氏・梶ヶ谷保夫氏・久保木正平氏・小里竜蔵氏・鈴木文代氏・中川忠助氏・原　惶氏・原　忠氏・原　博之氏・竜崎伊之吉氏と長井町漁業協同組合・横須賀市立長井小学校の皆様から多くのご教示を賜りました。以上記して厚く御礼申し上げます。なお，本文の執筆はⅠ・Ⅱ-2)・Ⅴを清水，Ⅱ-1)・Ⅳを武田，Ⅲを金谷が担当しました。

注および参考文献

1）川名　登・堀江俊次・田辺　悟（1970）：相模湾沿岸漁村の史的構造（1），横須賀市博物館研究報告，14，15～49。
2）①安池尋幸（1986）：相模湾沿岸漁村の流通構造－鮮魚の流通を中心に－，林陸朗先生還暦記念会編（1986）：『近世国家の支配構造』，雄山閣出版，260～284。②安池尋幸（1991）：相州三浦郡松輪村における肴仲買人に関する史料の紹介，横須賀市博物館研究報告（人文科学），36，101～110。
3）山下琢巳・山下須美礼・双木俊介（2006）：マグロ漁業根拠地三崎港の形成と商業活動の展開，歴史地理学調査報告，12，1～30。
4）清水克志（2009）：江戸・東京市場への鮮魚供給機能からみた三浦郡松輪村の地域的特質とその変容，歴史地理学野外研究，13，45～76。
5）蘆田伊人編・校訂（1975，原本1888）：『新編相模国風土記稿　第五集』，三浦郡巻之四，雄山閣，25～29。

6）石黒幸雄・大島暁雄・田辺　悟・辻井善弥（1976）：横須賀市長井の民俗，横須賀市博物館研究報告，19，1～59。
7）横須賀市立長井小学校編・発行（1979）：『長井のあゆみ』。
8）横須賀市自然・人文博物館所蔵。作成年代は明らかではないが，地租改正における地引絵図と考えられる。佐藤甚次郎（1993）：『神奈川県の明治期地籍図』，暁印書館，43～195。
9）前掲6），6ページ。
10）竹内常行（1980）：『日本の稲作発展の基盤　溜池と揚水機』，古今書院，316～317。
11）稚本敬一氏のご教示による。
12）久保木正平氏・竜崎伊之吉氏のご教示による。
13）前掲6），10ページ。
14）横須賀郷土資料復刻刊行会編・発行（1980）：『長井村村勢一班　大正十二年』。
15）横須賀市立長井小学校編・発行（1970）：『ながい』，20ページ。
16）横須賀市立長井小学校PTA広報委員会（1979）：『わたしたちのまち　総集編』。
17）竜崎知治氏のご教示による。
18）長井尋常小学校編（1927）：『郷土資料』。
19）前掲6），3ページ。
20）『農業集落カード』では，複数の字を合わせて1つの農業集落とする場合が多いが，長井地区では，両者がほぼ一致している。
21）前掲16）。
22）竜崎知治氏のご教示による。
23）竜崎知治氏のご教示による。
24）覗突漁とは，「ハコメガネ」と呼ばれる専用の器具を用いて，船上から海底を覗き込みながら，魚介類や海藻類を捕採する漁法である。前掲6），34ページ。
25）竜崎知治氏のご教示による。
26）前掲6），3ページ。辻井善弥は，長井村が近世の一時期に岡長井と浜長井に区分されていたことに関して，具体的には，小根岸・大久保・大木根・井尻が岡長井を，荒井・漆山・新宿・番場・屋形・東・仮屋ヶ崎が浜長井を，それぞれ構成していたことを推定している。
27）横須賀史学研究会編（1980～1991）：『浜浅葉日記』，第1～6集，横須賀市立図書館。
28）「北川屋」をはじめ米穀・酒を扱う長井村の商店は，浅葉家から米を購入しており，両者の間には相互補完的な取引関係が成立していたことがわかる。
29）前掲7），26～27。
30）神奈川県（1973）：『神奈川県史』，資料編6近世（3），633ページ。
31）三浦郡三崎町村高・家数・人別・商人・諸職人渡世向書上帳：『三浦古文化』，46，130～132。
32）熊野神社の寄進物に残る文字については現地調査に基づく。なお，商人名は石垣に刻まれた配列に準じて示した。
33）吉田伸之（2002）：『成熟する江戸』，講談社，286～326。
34）古田悦造（1996）：『近世魚肥流通の地域的展開』，179～196，前掲1），4）など。
35）鈴木博明家文書（写真版），神奈川大学日本常民文化研究所所蔵。
36）横須賀市（2007）：『新横須賀市史』，資料編近世Ⅰ，399ページ。
37）前掲2）①。
38）壱割船とは押送り船を示し，船を持たない小規模な魚商の荷を集め，運賃の1割を口銭として徴収し運搬する制度であった。
39）横須賀史学研究会（1977）：『相州三浦郡秋谷村（若命家）文書』，上巻，横須賀市立図書館，195ページ。
40）前掲7），38ページ。
41）佐藤善治郎（1906）：『三浦大観』，42～43。
42）前掲16）。
43）神奈川県三浦郡教育会（1918）：『三浦郡誌』，145ページ。なお，商業を副業とする戸数は325軒である。
44）前掲18）。
45）前掲7），41～42ページ。その後，明治25年（1892）に長井郵便局が創立したが，明治41年（1908）の『三浦繁昌記』（岡田緑風，1908）に「郵便局は馬場と云ふ処に在る」とあり，「馬場」は番場を示すと考えられ，新たに「郵便局」という形で番場に創設されたことがわかる。さらに，昭和37年（1962）の『横須賀市明細地図　南部版』によれば，その後番場から新宿に移転したことが確認できる。前掲18）。
46）前掲18）。
47）原　惶氏のご教示による。
48）原　忠氏のご教示による。
49）竜崎知治氏のご教示による。
50）原　惶氏のご教示による。
51）梶ヶ谷保夫氏のご教示による。同氏によれば，漁家が多い漆山にも2軒の銭湯があった。
52）鈴木文代氏のご教示による。
53）大久保了徹氏のご教示による。
54）原　博之氏のご教示による。
55）前掲7），46ページ。

56) 長井地区に設置された軍事施設は，現在の長井中学校の敷地に海軍砲術学校，荒崎には砲台が置かれ，台地上には広大な飛行場が設けられた。また現在の松ヶ崎に軍需工場である明治工業株式会社が開設されたことにより，他地域から多くの労働者が集まってきたという。前掲15)，27ページ。
57) 前掲７)，47ページ。
58) 竜崎知治氏所蔵資料。
59) 神奈川県編・発行（1979）:『組織的調査研究活動推進事業報告書』。
60) 神奈川県編・発行（1928）:『吾等の神奈川県』，267〜268。
61) 竜崎知治氏のご教示による。
62) 竜崎知治氏のご教示による。
63) 竜崎知治氏のご教示による。
64) 岡田徳夫氏・小里竜蔵氏のご教示による。
65) 岡田徳夫氏・小里竜蔵氏のご教示による。
66) 横須賀市博物館では，昭和49年（1974）より，長井地区における漁撈習俗を重点的に調査したが，その調査報告の冒頭では，「三浦半島は近年急速に開発が進み，沿岸漁業にその郊外的影響が大きく投影されたばかりか，漁業を中心とする社会は大きな転換期に直面している。とくに経済構造の変化にともなう他産業のあおりもあって，社会生活が激変したため，つい最近までひきつがれてきた伝統的な生活のしかたが根こそぎ消滅しつつある」と述べられている。前掲６)，１ページ。
67) ①農林水産省農林経済局統計調査部編（1964）:『海面漁業基本調査・漁業地区調査結果　第３分冊：南関東・東海』，農林統計協会。②横須賀市都市政策室都市政策課編・発行（1985）:『横須賀の漁業　第７次漁業センサス結果報告』。③横須賀市都市政策室都市政策課編・発行（2003）:『横須賀の漁業 2003年漁業センサス結果報告』。
68) 竜崎知治氏所蔵資料。
69) 『読売新聞』昭和44年（1969）６月15日。
70) 梶ヶ谷保夫氏のご教示による。
71) 竜崎知治氏のご教示による。
72) 竜崎知治氏所蔵資料。
73) 竜崎知治氏のご教示による。
74) 竜崎知治氏所蔵資料。
75) 三浦半島地域遊漁協議会（1975）:『三浦半島の遊漁業』。
76) 前掲４)，60〜62。なお三浦半島南部の三浦市域においても，金田湾や小網代湾でワカメなどの養殖を主たる漁業とする経営体が現れていることが指摘されている。
77) 竜崎知治氏のご教示による。
78) 『海苔タイムス』昭和42年（1967）３月21日。
79) 竜崎知治氏のご教示による。
80) 前掲３)，８ページ。
81) 長井地区以外には，堀内村などでも同様に岡集落と浜集落に二分された藩政村が存在する。